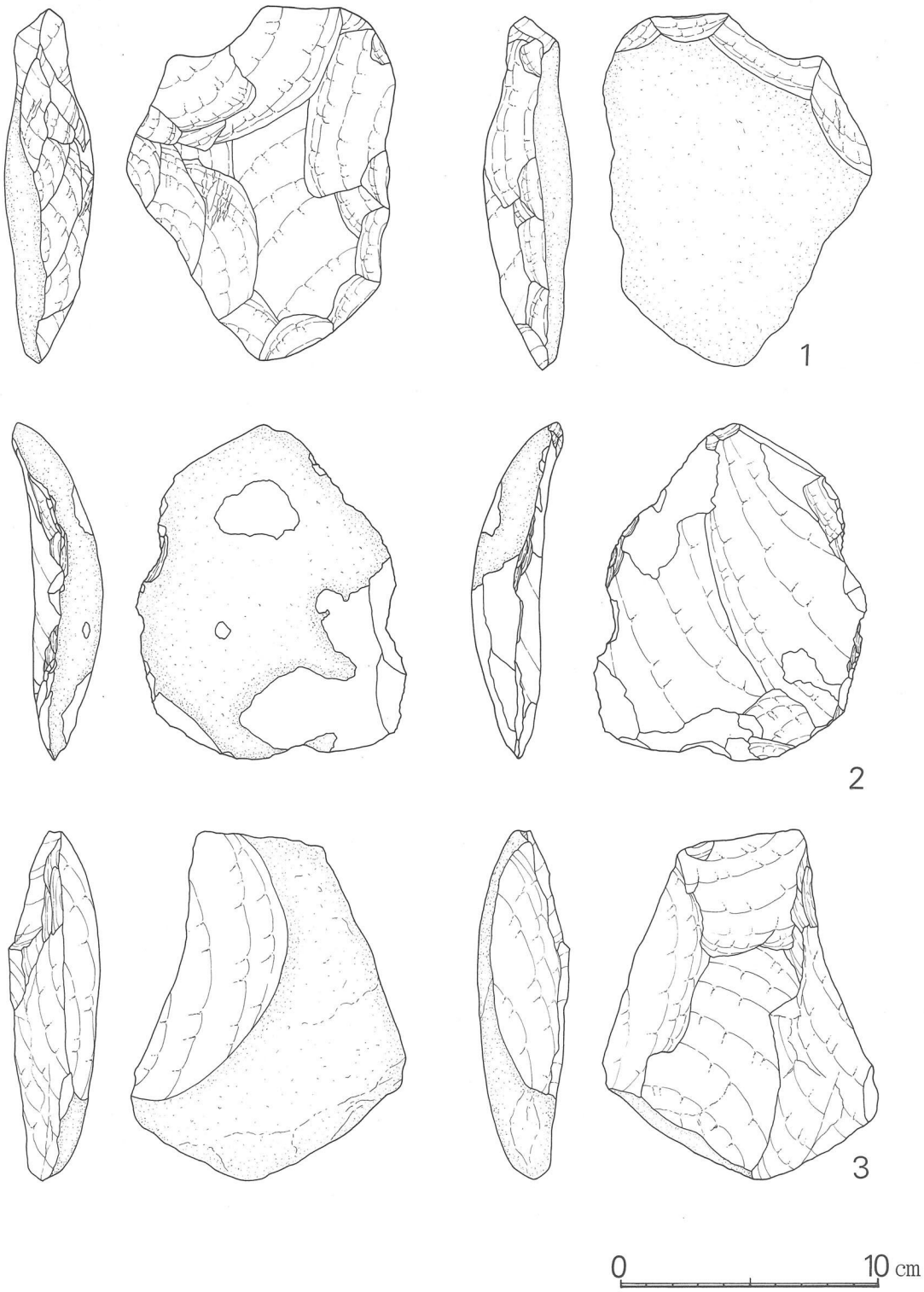
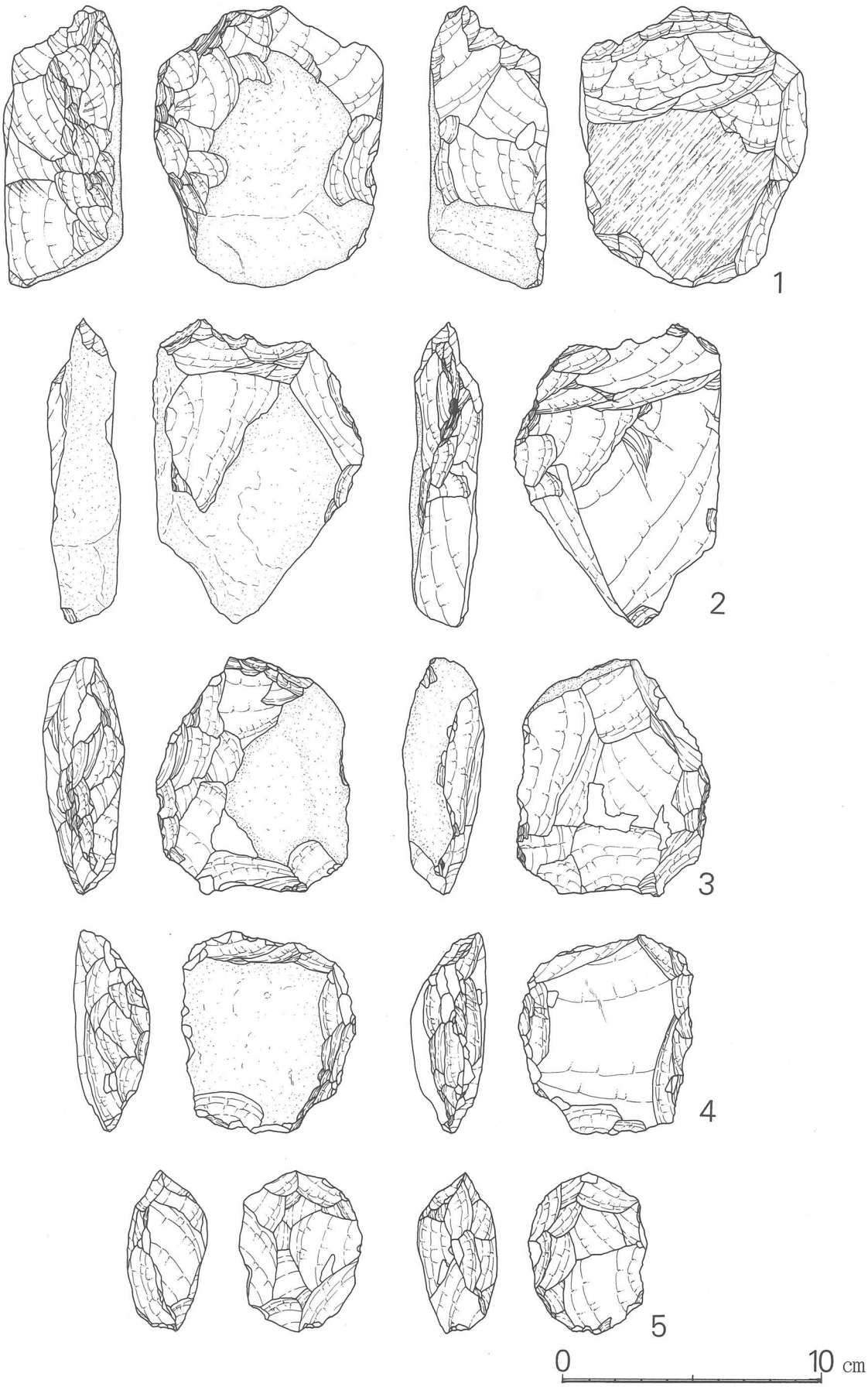
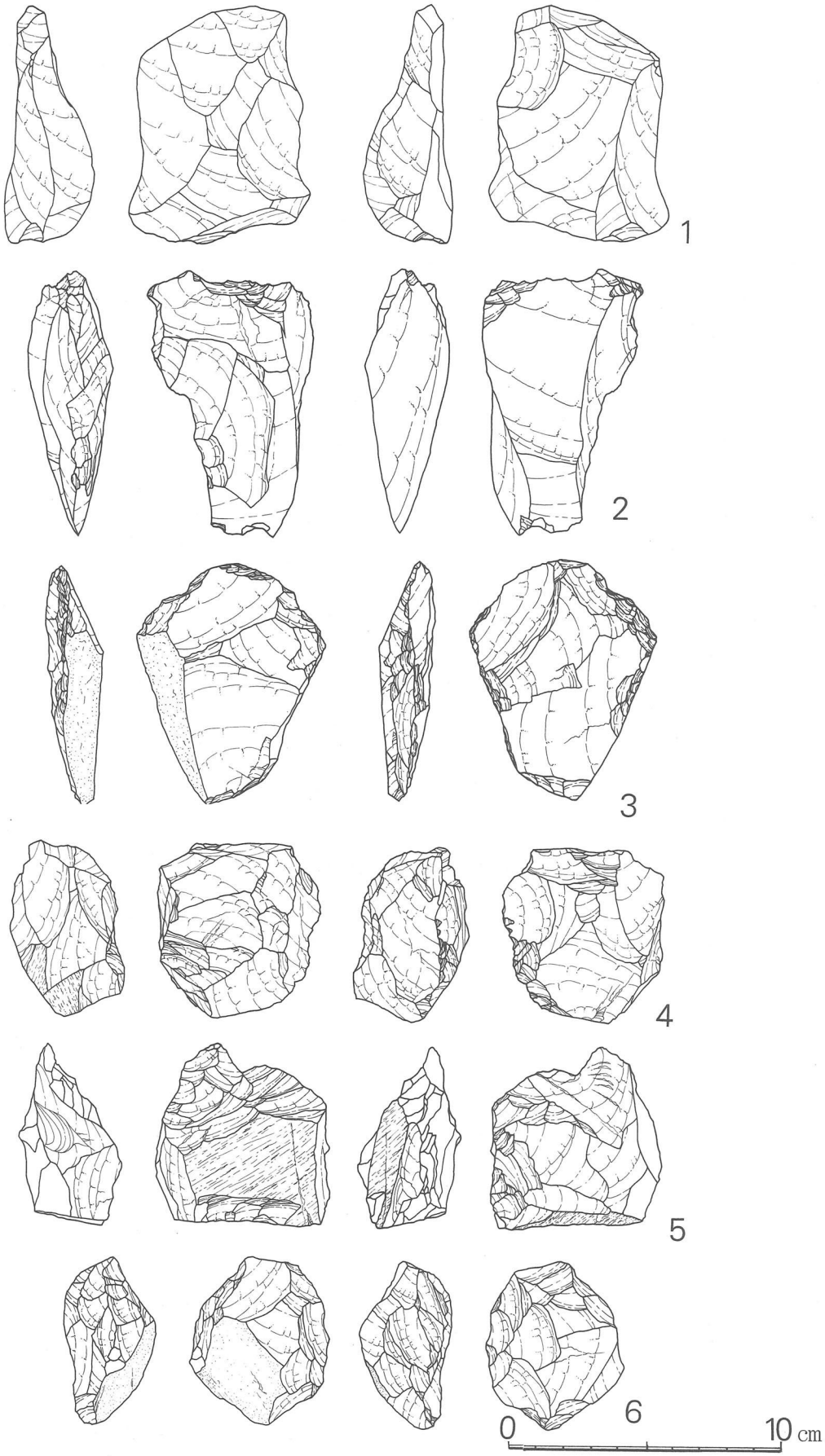


第35図　車木遺跡出土石器実測図



第36図　車木遺跡出土石器実測図



第37図　車木遺跡出土石器実測図

ている。

(h) 石　　皿（第38図）

１点で、Ａ－４区の第２層より出土し、本区に検出された集石遺構に近接し出土したものである。最大長39.5㎝、最大幅27.8㎝、最大厚8.3㎝、重量12.8kgを量る大型の石皿である。石質は扁平な砂岩礫を素材とし、表面は黄褐色を呈し、裏面は若干の凹凸はあるものの安定性に勝れ座りは良い。全体形は不整長方形を呈し、片端部は角ばっているが、一方の端部は片角が斜めにそげ僅かに幅狭く尖り気みとなっている。これの長軸中央部は側面図で明らかなとおり幅狭となった側が緩く盛り上がり、その個所を中心に両端部へと傾斜し、角ばった幅広い側へとは長く延びている。短軸中央部の断面形は両端が分厚く肩部を作出し、上面は図示しているとおり内湾し凹んでいる。この形状は角ばった幅広い端部へと続き、幅狭くなった一方の面は緩やかに凹凸を持ちながらも平坦となり端部へと移行する。

使用痕は身幅を狭めた側の中央部から角ばった幅広の端部へと向かい滑らかな状態となって残されている。特に中央部の摩耗は強く、既述のとおり湾曲するほど凹み表面にはかすかに斜行する細線条痕が観察され、端部中央の角面に接する上面は磨り減ってすべすべの肌を呈する。なお、本資料は完全な形をとどめるものの中央部から真二つに割れたまま出土し、片端部表面にはひび割れが３条入っている。

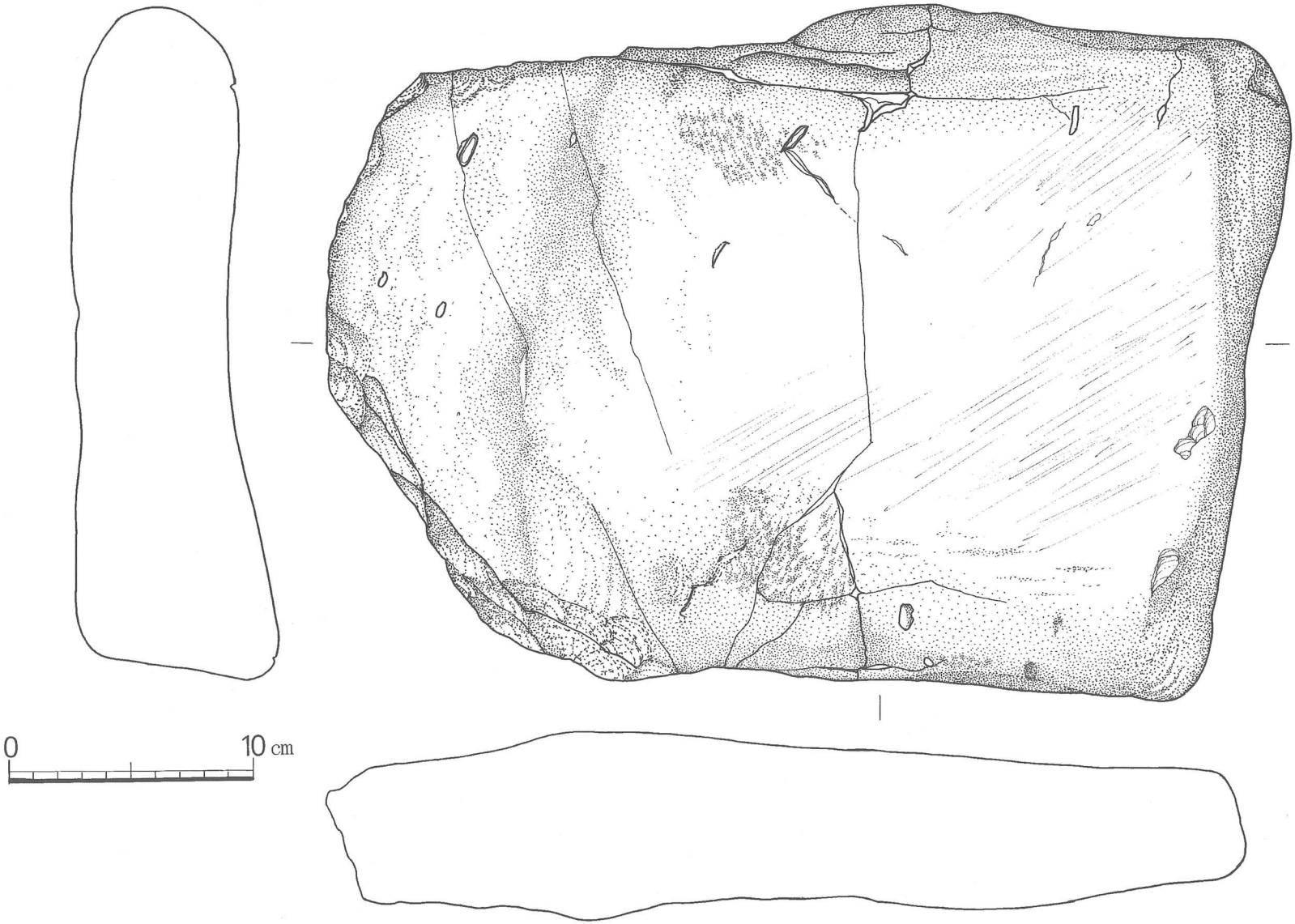
(i) 第２～３層出土の石器剥片（第18図～第21図）

石器剥片はＡ－１区～Ａ－４区の第２層～第４層までに出土が確かめられ、特にＡ－１区～Ａ－３区に多くみられた。ここでは縄文前期の鍵層となる第２層出土資料は割愛し、第３層、第４層より出土した分で良好なもの42点を抽出し（第18図～第21図）に図示した。なお、多数の姫島産黒曜石の出土をみたＡ－４区の資料に限っては第２層より出土した黒曜石も図示している。

第３層出土の頁岩を素材とする剥片15点は、表面が乳白色に風化変色した珪質頁岩２点と緑色チャート製１点が含まれている。主体をなす縦長剥片は長さ５㎝～６㎝、幅３㎝～４㎝前後のものを一般とし、最大は長さ8.5㎝、幅3.3㎝、厚さ1.1㎝、最小は長さ３㎝、幅1.9㎝、厚さ1.1㎝を測る。全体的に長さに比べやや幅広となるものが目立ち、片面に１～２条の棟を持つものが多く、断面三角形状をなしている。これらの片端には幅狭い平坦打面をとどめている。

横長剥片は長さ４㎝、幅６㎝前後を測る分厚なものがみられ、中にはＡ－２区で見られる№４のような大型のものも含まれている。これらも前者同様、幅狭い平坦打面をとどめ、剥片の一部に自然面を幅狭く残すもの、また打面に自然面をとどめるものもみられる。

第４層出土の頁岩製剥片18点は、第３層同様、縦長が勝り、横長はやや少ない。前者は長さ６㎝、幅3.5㎝、厚さ１㎝前後のものを主体とし、最大は長さ８㎝、幅６㎝、厚さ1.8㎝を測り、最小は長さ3.2㎝である。これらは第３層出土のものに見られたものと同様、縦長とはいえやや幅広で、剥片の一部に自然面を残すもの、また幅狭い平坦打面をとどめる。



第38図　車木遺跡出土石器実測図

横長剥片は長さ４㎝、幅６㎝～７㎝前後のものが一般的で、最大は長さ５㎝、幅8.5㎝、厚さ1.2㎝を測る。Ａ－１区には少数ではあるが三角形状をなす良好な資料（№３・６・７）の出土をみる。Ａ－３区に出土の横長剥片の打面には自然面をそのまま残すものが出土している。

以上、頁岩製剥片について記述してきたが、これらの他に既述のとおり姫島産黒曜石剥片があり、さらに若干のサヌカイト片がある。サヌカイト片は16点で、Ａ－１区とＡ－４区から出土している。大きさは１㎝～３㎝前後の細片で、中にはＡ－１区№11のような比較的大きなものもある。どれも肉薄く扁平で、色調は灰白色、灰黒色を呈し、表面に縞模様がみられ、全くそれを見ぬ黒色のものもわずか含まれている。出土層位はＡ－４区出土の３点の資料が第２層から、Ａ－１区の２点は共に第４層出土である。ちなみに、これらの総重量は40ｇである。

姫島産黒曜石の剥片は73点を数え、それらは長さ２㎝～３㎝前後のもの、さらに１㎝前後の細片までがあり、形は不定形で肉薄いもの、分厚なものなどがある。色調は灰色、灰黒色、乳白色などを呈し、鋭い光沢のあるもの、鈍いもの、風化して光沢を失ったものなどがみられ、中には表面がザラザラとなった原礫面をとどめるものも見られる。出土地区はＡ－４区に最も多く、次いでＡ－１区、Ａ－３区に、Ａ－２区からの出土は極少。層位的にはＡ－２区（№12）、Ａ－４区（№８）の資料に第４層出土のものが１点づつ確認され、第３層からの出土はＡ－２区に１例、Ａ－３区に４例、Ａ－４区に３例の計８例が明らかであり、第２層出土はＡ－１区の資料７点総てと、Ａ－２区に１例、Ａ－３区に１例、Ａ－４区からも７例が確認され、本層からの出土例は16例を数え最多を示す。総重量98ｇを量る。

第４表　車木遺跡出土石器観察表

図番号	出土地区	器　種	石　質	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重　量（g）	備　考
第30図１	Ａ－２	石　鏃	珪質頁岩	2.6	1.7	0.4	0.84	片脚、片脚端欠損
2	Ａ－４	石　鏃	頁　岩	2.1	1.7	0.5	1.00	先端・片脚端欠損
3	表　採	石　鏃	姫島産黒曜石	2.6	1.6	0.4	0.97	片脚欠損
4	Ａ－４	石　鏃	姫島産黒曜石	2.1	1.7	0.4	0.72	先端、片脚欠損
5	Ａ－２	石　鏃	姫島産黒曜石	2.7	2.0	0.5	1.02	片脚欠損
6	Ａ－４	石　鏃	姫島産黒曜石	2.2	2.0	0.5	0.94	先端・片脚端欠損
7	表　採	石　鏃	サヌカイト	2.2	1.9	0.3	0.56	片脚欠損
8	Ａ－１	石　鏃	姫島産黒曜石	2.0	1.5	0.4	0.64	片脚欠損
9	Ａ－１	石　鏃	姫島産黒曜石	1.4	1.6	0.4	0.63	先端・片脚端欠損
10	Ａ－３	石　鏃	サヌカイト	1.7	1.2	0.4	0.37	完形、灰白色に風化変色
11	表　採	石　鏃	姫島産黒曜石	1.6	1.2	0.3	0.37	先端欠損
12	表　採	石　鏃	サヌカイト	1.4	1.4	0.4	0.55	先端欠損
13	Ａ－３	石　鏃	姫島産黒曜石	1.4	1.1	0.3	0.27	片脚端欠損
14	Ａ－４	石　鏃	チャート	1.3	1.2	0.4	0.44	基部欠損
15	表　採	石鏃未製品	珪質頁岩	3.3	2.4	1.6	6.32	第一次剥離面を両面に残す。
16	表　採	石鏃未製品	サヌカイト	4.7	2.6	0.8	6.35	横長剥片素材、打面残す。
17	表　採	石鏃未製品	頁　岩	4.3	3.7	1.2	14.35	粗製剥離調整
18	表　採	楔形石器	チャート	2.5	1.9	0.7	2.34	灰茶色、鈍い光沢あり。
19	表　採	楔形石器	チャート	2.5	1.1	0.9	2.01	青黒色、鈍い光沢あり。
20	表　採	楔形石器	頁　岩	3.1	2.9	1.1	10.57	良質、黒色、風化はほとんど認められない。

第５表　車木遺跡出土石器観察表

図番号	出土地区	器　種	石　質	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重　量（g）	備　考
第31図１	Ａ－１	石　錘	砂　岩	4.85	3.75	1.17	28.0	完形
2	Ａ－１	石　錘	砂　岩	4.00	3.47	0.98	19.0	完形
3	Ａ－１	石　錘	砂　岩	4.25	3.80	1.10	22.5	完形
4	Ａ－２	石　錘	砂　岩	4.30	3.75	1.20	25.0	完形
5	Ａ－２	石　錘	砂　岩	4.30	3.40	1.25	26.0	完形
6	Ａ－２	石　錘	砂　岩	4.20	3.45	1.10	21.0	完形
7	表　採	石　錘	砂　岩	3.62	3.11	1.41	20.5	完形
第32図１	Ａ－１	打製石斧	頁　岩	8.1	5.65	2.0	114.5	完形
2	表　採	打製石斧	頁　岩	5.2	4.3	2.0	62.06	頭部残片
3	Ａ－３	打製石斧	頁　岩	4.4	3.8	1.1	23.5	頭部残片
4	Ａ－４	打製石斧	頁　岩	19.4	8.2	2.4	410.50	大型扁平、完形
5	Ａ－４	スクレイパー	頁　岩	4.4	6.35	1.0	26.5	横長剥片素材、完形
6	Ａ－１	スクレイパー	頁　岩	8.6	5.2	1.6	66.0	不定形横長剥片素材、完形
7	Ａ－１	スクレイパー	頁　岩	7.7	4.3	1.6	44.0	横長剥片素材、完形
第33図１	Ａ－１	スクレイパー	頁　岩	13.4	10.3	2.7	354.68	大型幅広縦長剥片素材、完形
2	Ａ－１	スクレイパー	頁　岩	7.2	8.9	2.4	129.82	肉厚横長剥片素材、完形
3	Ａ－３	スクレイパー	頁　岩	4.9	11.1	2.1	101.31	長方形大型剥片素材、完形
4	Ａ－４	スクレイパー	珪質頁岩	4.9	8.5	1.5	39.81	横長剥片素材、完形
5	Ａ－３	スクレイパー	頁　岩	3.3	4.6	1.0	9.92	横長剥片素材、茶褐色風化変色、完形
6	表　採	スクレイパー	頁　岩	6.8	9.7	1.5	75.33	横長剥片素材、完形
第34図１	Ａ－２	スクレイパー	頁　岩	7.9	6.9	1.9	73.5	横長剥片素材、完形
2	表　採	スクレイパー	頁　岩	9.1	5.6	1.7	98.0	肉厚横長剥片、完形
3	表　採	叩　石	砂　岩	8.1	3.5	2.9	102.93	棒状、片端欠損
4	Ａ－１	叩　石	砂　岩	14.8	9.0	5.1	862.88	楕円形礫素材、片端欠損

第６表　車木遺跡出土石器観察表

図番号	出土地区	器　種	石　質	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重　量（g）	備　考
第34図５	表　採	叩　石	砂　岩	12.4	9.9	6.3	937.85	楕円形礫素材、片側面欠損
第35図１	Ａ－１	石材核	頁　岩	13.8	10.4	3.5	477.32	大型、片面に自然面を幅広く残す
2	表　採	石材核	頁　岩	13.1	10.4	3.5	395.74	大型、片面に自然面を幅広く残す
3	表　採	石材核	頁　岩	13.6	10.6	3.6	449.90	大型、片面に自然面を幅広く残す
第36図１	表　採	石材核	頁　岩	11.0	8.9	4.6	576.70	大型、両面に自然面を幅広く残す
2	表　採	石材核	頁　岩	11.8	8.2	2.8	277.86	大型、扁平。片面に自然面広く残す
3	表　採	石材核	頁　岩	9.3	7.5	3.2	255.72	小型、片面に自然面を幅広く残す
4	表　採	石材核	頁　岩	7.8	6.7	2.9	179.78	小型、片面に自然面を幅広く残す
5	表　採	石材核	頁　岩	6.2	4.8	3.1	83.81	小型、全面に剥離面残す
第37図１	Ａ－３	石材核	頁　岩	8.8	6.7	3.3	173.11	小型、全面に剥離面残す
2	Ａ－２	石材核	頁　岩	9.8	6.1	3.1	127.04	小型、肉厚。全面に剥離面残す
3	表　採	石材核	頁　岩	8.8	6.9	2.0	118.95	小型、扁平。側面に自然面残す
4	Ａ－１	石材核	頁　岩	6.5	6.0	4.2	180.28	小型、肉厚。全面に剥離面残す
5	表　採	石材核	頁　岩	6.8	6.4	3.8	151.42	小型、原礫面を片面に幅広く残す
6	Ａ－３	石材核	頁　岩	6.2	5.2	3.4	102.04	小型、肉厚。片面に自然面残す

第７表　車木遺跡出土石器剥片観察表

図番号	出土地区	石　質	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重　量（g）	備　考
第 18 図　1	Ａ－１区	珪質頁岩	3.7	3.6	0.7	7.5	乳白色
2		頁岩	2.8	4.4	1.4	20.5	灰白色
3		頁岩	3.6	6.5	0.8	17.0	青黒色
4		珪質頁岩	3.1	3.0	0.6	6.5	乳白色
5		珪質頁岩	4.5	6.0	1.4	33.0	乳白色
6		頁岩	6.0	7.2	1.6	45.5	黄灰色
7		頁岩	4.0	6.8	1.0	25.0	淡黄色
8		頁岩	7.1	4.4	1.4	43.0	灰青黒色
9		サヌカイト	1.2	2.6	0.45	1.0	灰黄色
10		頁岩	5.6	3.7	1.0	20.0	淡黄色
11		サヌカイト	4.4	3.8	0.7	11.0	灰白色
第 19 図　1	Ａ－２区	珪質頁岩	5.6	5.4	1.8	52.5	乳白色
2		頁岩	6.0	4.5	1.5	33.0	灰黒色
3		頁岩	5.3	3.9	1.6	35.0	青黒色
4		頁岩	6.1	10.1	1.8	97.5	青黒色
5		頁岩	4.4	5.7	1.4	40.0	淡灰黄色
6		頁岩	6.4	4.6	1.2	37.0	青黒色
7		頁岩	4.7	8.5	1.2	50.0	黄灰色
8		頁岩	6.5	5.8	1.4	48.5	灰青黒色
9		緑色チャート	2.5	1.7	0.6	3.0	良質光沢あり

第８表　車木遺跡出土石器剥片観察表

図番号	出土地区	石質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
第19図 10	A－2区	頁岩	7.7	5.5	1.8	65.5	黄灰色
11		頁岩	7.5	3.3	1.3	30.0	灰黄色
12		姫島産黒曜石	1.2	1.6	0.4	0.5	乳白色
第20図 1	A－3区	頁岩	4.8	5.7	1.9	75.0	灰黒色
2		頁岩	5.5	7.5	2.3	84.5	青黒色
3		頁岩	3.4	4.8	0.8	11.5	灰黒色
4		頁岩	3.9	3.0	1.0	15.0	灰黒色
5		頁岩	4.2	2.9	0.8	9.0	灰黒色
6		頁岩	6.8	4.8	1.5	33.0	青黒色
7		頁岩	4.8	3.2	1.25	18.5	青黒色
8		頁岩	5.4	3.4	0.75	14.5	青黒色
9		頁岩	2.6	4.9	0.8	9.0	灰青黒色
10		青黒色チャート	2.9	1.8	1.2	7.0	良質光沢あり
第21図 1	A－4区	頁岩	4.2	4.1	2.0	40.0	灰黒色
2		姫島産黒曜石	2.4	1.4	0.7	1.5	乳白色
3		姫島産黒曜石	2.2	3.3	0.7	4.5	灰黒色、原礫面残す
4		頁岩	7.8	6.2	2.0	94.5	灰黒色
5		姫島産黒曜石	2.7	1.3	0.6	1.5	乳白色、原礫面残す
6		姫島産黒曜石	3.4	1.8	0.7	2.5	乳白色
7		姫島産黒曜石	2.25	2.6	0.8	3.5	乳白色、原礫面残す
8		姫島産黒曜石	1.1	1.3	0.3	0.5	乳白色
9		頁岩	5.55	3.7	0.8	15.0	青黒色

第6章　考　　察

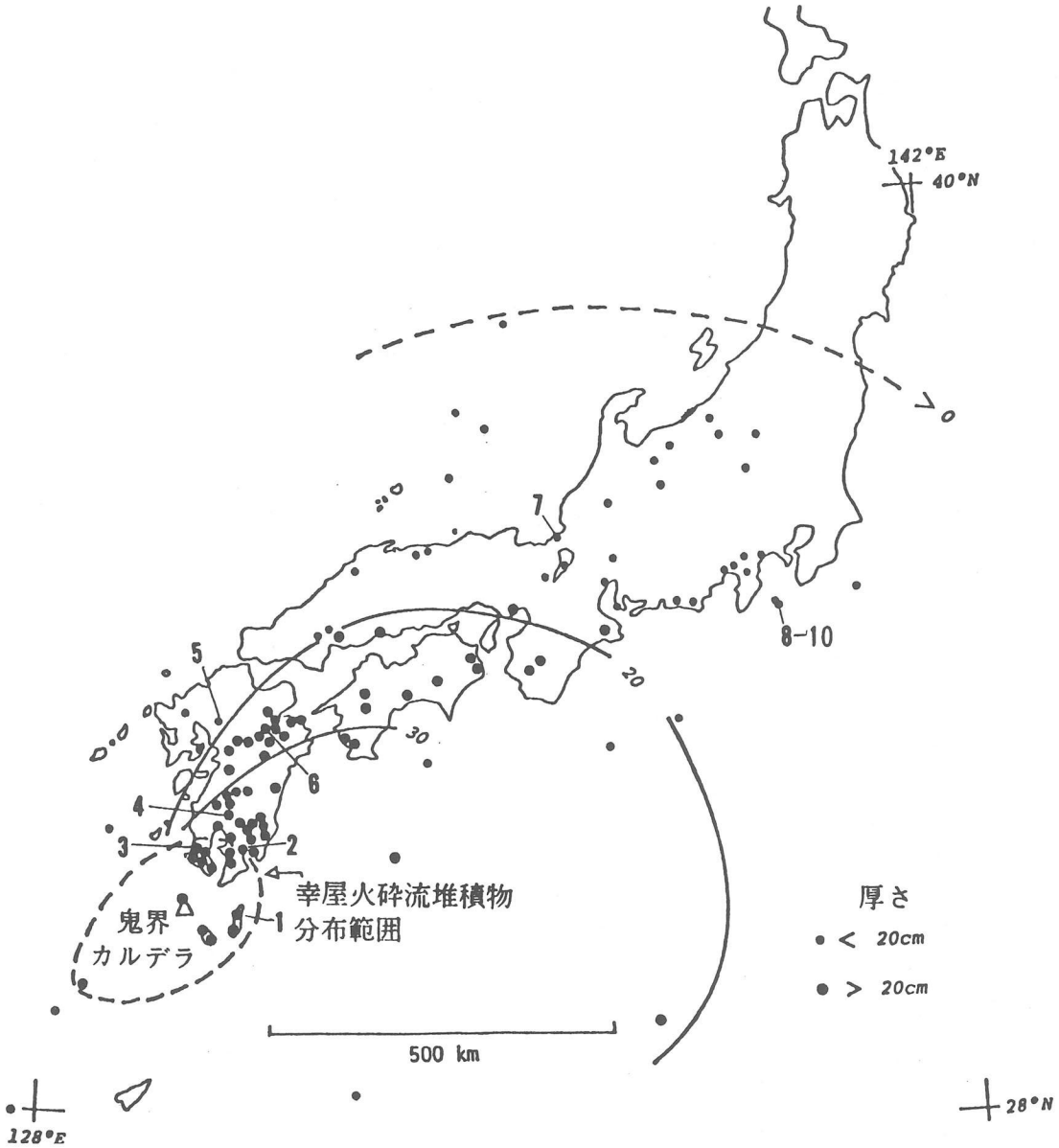
車木遺跡の発掘調査は、ほ場整備に係っていることもあって調査に制約があり、小範囲、短期間にとどまるものであった。それにしても思っていた以上の成果に恵まれ幸いであった。

まず、第1層の表土からは近世～中性にかけての陶磁器片が攪乱された状態での出土ではあったもののまずまずの量が得られた。主体をなすのは近世の遺物で、中世に属するものは少ない。弱少とはいえ龍泉窯、景徳鎮窯の青磁、白磁、青花などが得られたことは意義深く、今後の内陸山地における中世史を研究する上で貴重である。これらの遺物は、本地域が一条氏の勢力圏内に包括されていたであろうことや、本遺跡に近接する勝城跡との関係の中で存在したものと考えて間違いないであろう。それにしても青磁や白磁、青花は一条氏の拠点である中村周辺にとどまらず、意外にその流通は広範で、山間部にまで奥深く搬入されていたことがこれらの遺物は物語る。近年、調査された大宮・宮崎第1遺跡[1]や奈路遺跡[2]、木屋ヶ内遺跡[3]などからも輸入陶磁器のまとまった出土資料に恵まれ、それを傍証している。要するに、これらの遺物は我々が考えている以上に一般に普及し、特殊な扱いにあったものではなく普遍的に使用されていたものと推考する。

次に近世の遺物はその特徴から幕末期のものを主体に一部明治以降あるいは現代のものを含むものであったが、その量の多さから本地区にはかなりの人々が住み着き生活していたことが知られるのである。言うまでもなく、今日の下家地地区における山間集落は、中世に起こり、幕末期を経て形成に至っていることはここに詳述するまでもない。

本遺跡主体の縄文期についてであるが、第2層から第4層までがその文化層である。第2層は鬼界カルデラ（^{14}C 6,300年前）の噴火によって堆積したアカホヤ火山灰土層で、九州では縄文時代前期を決定する鍵層となっている地層であり、第39図は我が国における鬼界アカホヤ火山灰の降下状況を示したものである[4]。この第2層の層厚は20cm～30cmを測り比較的厚く良好な堆積状況を示していた。本遺跡における出土遺物のほとんどは第2層からの出土であり、また2基の集石遺構も本層から検出されたものである。さらに遺物は第3層、第4層からも少ないものの出土をみた。第4層が文化層としては最下層を示し、本遺跡で最古となる。この層からは頁岩製の寸詰まりとなった小型打製石斧1点が出土しているが、土器の出土はなかった。第32図1としたものがその資料であり、特徴から縄文早期前半に編年が可能かと思われる。本層からは姫島産黒曜石と珪質頁岩製の石鏃2点（第30図1・9）の出土があり、その石鏃も型式編年的には早期の特徴を有し、先の資料の編年観と何ら矛盾するものではない。その他に石器剥片が多く出土しているが、石質の主体は頁岩で中にはサヌカイトと姫島産黒曜石が少数みられ、この時期に九州・瀬戸内両地方と交易が開始されたことを証する。

第3層からは土器（第28図1～7）の出土が明らかであるが、細片で、しかも無文部であることから型式名については明らかにし得ない。ただ第3層の下位からの出土であり前期以前のものであることは間違いない。強いてその時期を求めるならば早期後半に編入が妥当かと思わ



第39図　鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）の等厚線図

れる。本層からも姫島産黒曜石、サヌカイト剥片が出土し、石鏃も５点（第30図２・４・10・13・14）の出土がみられ、その中には姫島産黒曜石製が２点、サヌカイト製１点が含まれている。また、スクレイパーも４点（第32図５、第33図１・３・４）出土しているが、珪質頁岩１点の他は総て頁岩である。編年的には、これらは総て土器同様、早期後半に位置付けが可能であろう。

第２層は既述のとおり最も多くの遺物を出土し、特に良好な土器片の出土に恵まれている。（第29図１～15）に図示した資料がそれで、同図(6)は器面に描かれた文様、器質、器形などの特徴から、これは瀬戸内の前期初頭の羽島下層式とみてよいものである。他のものは器面の内外面に彫りの深い特徴的な条痕文をとどめるものであり、同図（４・５）の外面にはミミズばれ状の隆帯文をみる。これらの特徴から(6)を除く他は九州系の前期初頭轟Ｂ式土器とみて大

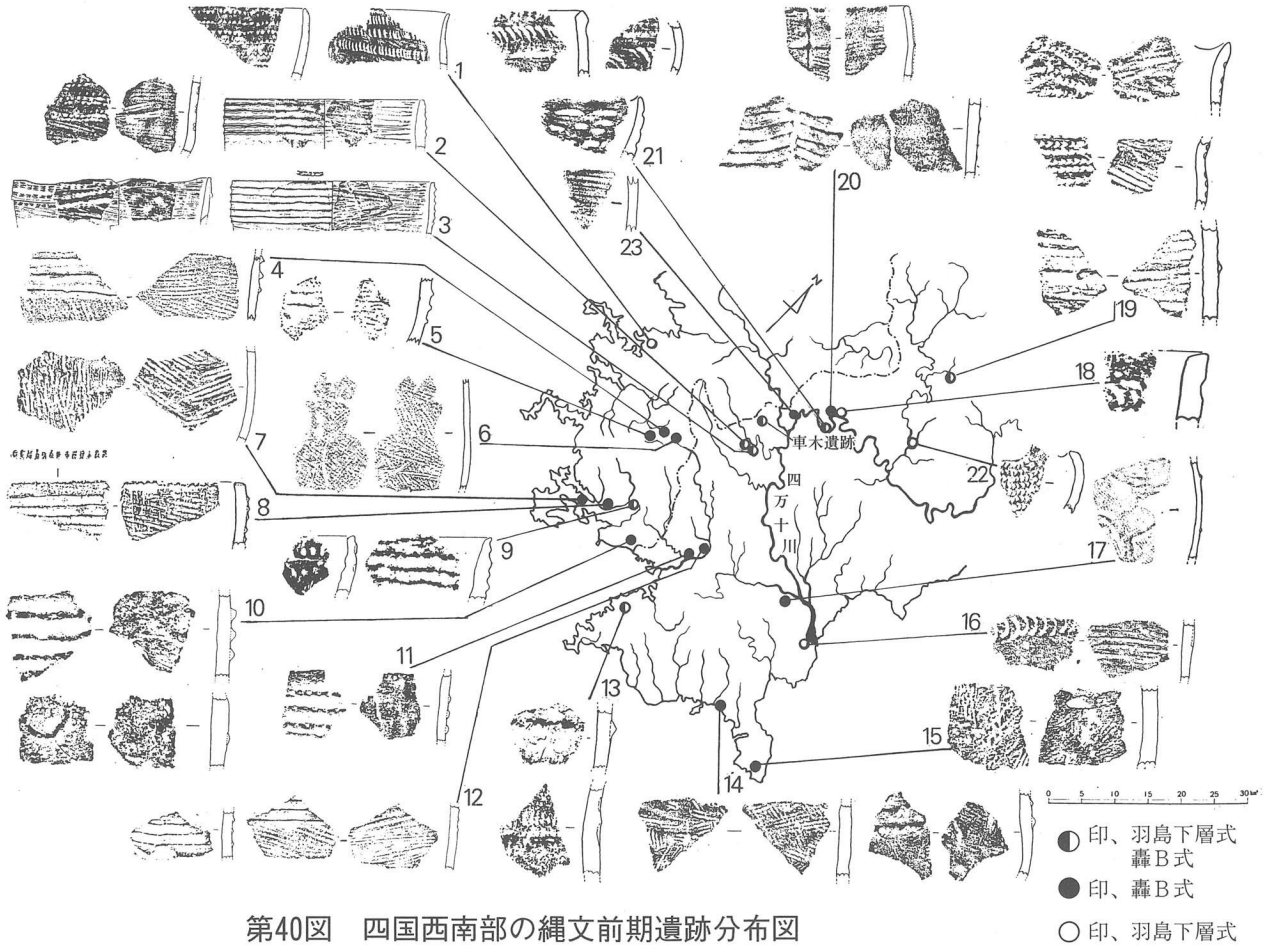
過あるまい。同図(9)は、本地方の下益野Ｂ地区遺跡出土の轟Ｂ式としたものに酷似し注目される。この時期の四国西南部は、瀬戸内地方から羽島下層式土器文化が、一方、九州地方から轟Ｂ式土器文化が波及し、ちょうど本地方で両地方からの文化が交錯しミックスした様相を呈する。

本遺跡にみられるように瀬戸内系と九州系の両土器をみる遺跡は豊後水道に面した梶郷駄場[5]、竜ヶ迫[6]と内陸部の大宮・宮崎第１地点遺跡[7]、大宮・宮崎第２地点遺跡[8]、広瀬[9]、影野地[10]と６個所が知られている。一方、轟Ｂ式土器と羽島下層式土器をそれぞれ単独に出土する遺跡も多く見られるが、総体的に羽島下層式土器のみを出土する遺跡は少なく、轟Ｂ式単独の遺跡は豊後水道に面する南斜面に集中する傾向にある（第40図）。本遺跡出土の土器にみる特徴、特に轟Ｂ式土器様相は、大宮・宮崎第２地点遺跡[11]のものと同一といってよいもので、本遺跡の前期土器を残したのは大宮・宮崎第２地点遺跡の縄文集団であった可能性が高い。いずれにしても本遺跡の前期初頭は、大宮・宮崎第２地点遺跡と密接な関係にあったことは間違いなかろう。

次に石器では（第31図１～７）の石錘、（第30図18～20）の楔形石器、（第32図２～４）の打製石斧、（第33図２・５、第34図１）のスクレイパー、（第34図４）の叩石、（第30図３・５・６・７・８・11・12）の７点を数える石鏃など総てが轟Ｂ式、羽島下層式土器に伴うものとみなされる。特に７点の石鏃は５点が姫島産黒曜石製であり、また、第２層からの姫島産黒曜石剥片の出土量の多い事実から、この時期は九州地方との交易が盛んに行われていたことが知られるのである。実は、第３層～第４層が示す早期から第２層の前期にかけての本地方は姫島産黒曜石を出土する遺跡が98個所も知られ（第41図）、この時期に姫島産黒曜石交易が盛んであったことが既に明らかとなっているのである。特に姫島産黒曜石は、本地方の南斜面、津島町北灘湾に注ぐ岩松川上流地帯に所在する影平[12]、池ノ岡[13]、そして豊後水道に面する海岸部の深泥[14]、梶郷駄場[15]に多量の遺物をみる。一方、四国西南端の足摺半島南斜面にみる唐人駄場[16]や太平洋に面する海岸段丘上に立地する双海中駄場[17]、平野茶園遺跡[18]にも多量の良好な姫島産黒曜石製石鏃や剥片の出土が知られている。本遺跡の姫島産黒曜石も以上の遺跡を経由し搬入されたものと考えられるのである。ちなみに、姫島産黒曜石は、石鏃を主体に尖頭状石器やスクレイパー、石錐など小型石器にその使用が限られている。

第２層の石器で何といっても注目されるのは石錘である。石錘は発掘調査区が小範囲であったこともあって７点にとどまるが、しかし、第２層アカホヤ火山灰土層中からの確かな出土資料であるところに価値がある。

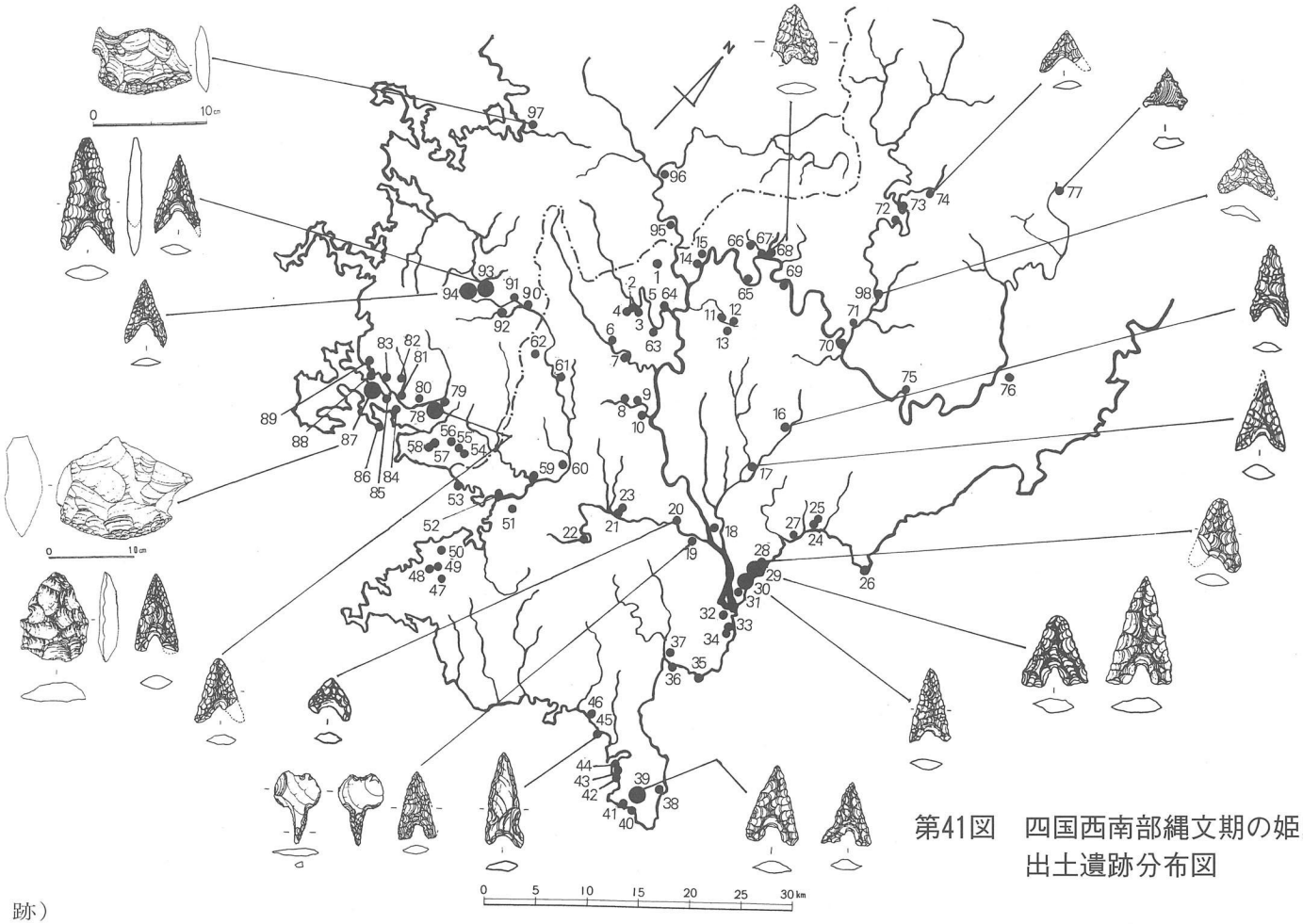
本地方の縄文期における遺跡からの出土は早くから知られ、現在、南四国では40個所の遺跡が明らかである（第42図）。その分布をみると西高東低で、圧倒的に西南部に多く、しかも四万十川流域に集中している。本流域の遺跡から出土した石錘のほとんどが楕円形礫の長軸両端に紐掛けの凹みが作出されるタイプで、しかも縄文後期に属するものであった。本遺跡のものは紐掛け部となる凹みが短軸の両側面に作り出される特徴を持ち従来のものとは異なる特異なタイプである。そして、その時期も前期初頭に編年されるものである。これは、四万十川流域



第40図　四国西南部の縄文前期遺跡分布図

（遺　跡）

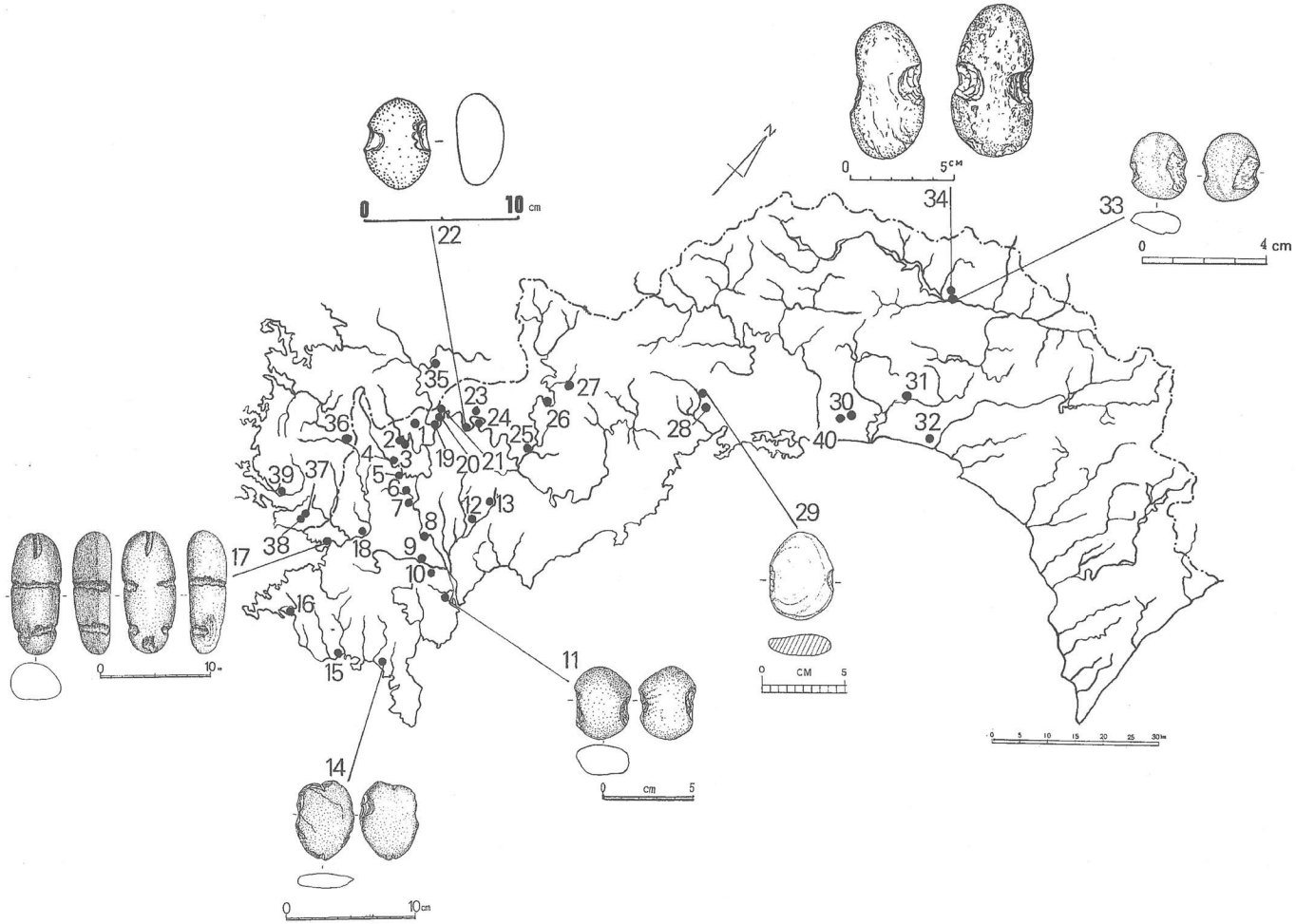
1．無　　月　2．大宮・宮崎Ⅰ　3．大宮・宮崎Ⅱ　4．池ノ岡　5．影　　平　6．中駄場
7．深　　泥　8．平城貝塚　9．梶郷駄場　10．茶　　堂　11．二ノ宮　12．橋　　上
13．竜ケ迫　14．下益野B　15．唐人駄場　16．初　　崎　17．具同船戸　18．十川駄場崎
19．影野地　20．川口ホリキ　21．広　　瀬　22．木屋ケ内　23．江川中畝



第41図　四国西南部縄文期の姫島産黒曜石出土遺跡分布図

（遺　跡）

No.１車木、２大宮･宮崎Ⅰ、３大宮･宮崎Ⅱ、４大宮、５上薮ケ市、６曽我の西、７広井駄場、８ひろぞう、９踊碆山、10鳥打場の下、11堂ケ市、12棟屋敷、13胡麻谷、14本村半家、15江川中畝、16大用、17奈路駄場、18中村貝塚、19具同船戸、20国見、21有岡ツグロ橋下、22梅ノ木、23久保畑、24東駄場、25奥駄場、26井ノ岬、27入野、28双海本駄場、29双海中駄場、30平野茶園、31平野駄場芝、32初崎、33名鹿ビシヤゴ駄場、34名鹿ヌキデ駄場、35布駄場、36南松原、37下ノ加江、38井ノ口、39唐人駄場、40スホノロ鼻、41沖ノ台、42長崎鼻、43中ノ浜、44新浦、45松崎、46下益野Ｂ地区、47長沢、48ナシケ森第２地点、49大駄場、50竜ケ迫、51正和、52宿毛貝塚、53宇須々木、54大又、55広見、56岡駄場、57茶堂Ⅱ、58茶堂Ⅰ、59二ノ宮、60橋上、61五助駄場、62笹平、63小津賀、64沖、65広瀬、66古城、67駄場崎Ｂ、68駄場崎、69奈路、70吾川、71江師、72庄司ヶ市、73小野、74影野地、75北川、76仁井田、77船戸、78梶郷駄場、79アナガイチ、80下緑、81平城貝塚、82和口、83八幡野、84節崎、85仙碆鼻、86天嶬鼻、87深泥、88大島、89銭坪、90犬除、91中駄場、92槇川、93池ノ岡、94影平、95真土、96岩谷、97伊吹町、98木屋ケ内



第42図　南四国縄文期の石錘出土遺跡分布図

（遺　跡）

No.1車木、2大宮・宮崎第1地点、3大宮・宮崎第2地点、4曽我の西、5広井駄場、6踊碆山、7鳥打場の下、8三里、9国見、10、船戸、11初崎、12奈路駄場、13大用、14下益野B地区、15片粕、16尻貝、17宿毛貝塚、18橋上、19宮地、20本村半家、21江川中畝、22広瀬、23川口ホリキ、24小野、25江師、26庄司ケ市、27影野地、28新土居、29姫野々上町、30西分増井、31栄工田、32田村
33松ノ木、34長徳寺、35岩谷、36犬除、37茶堂Ⅰ、38茶堂Ⅱ、39平城貝塚、40山根

における石錘を用いての網漁撈の開始が後期初頭とされていたのが、一挙に前期初頭にまで遡ることを決定付けたことで、その意義は大きい。もちろん四国西南部では現在のところ最古の石錘となるものである。

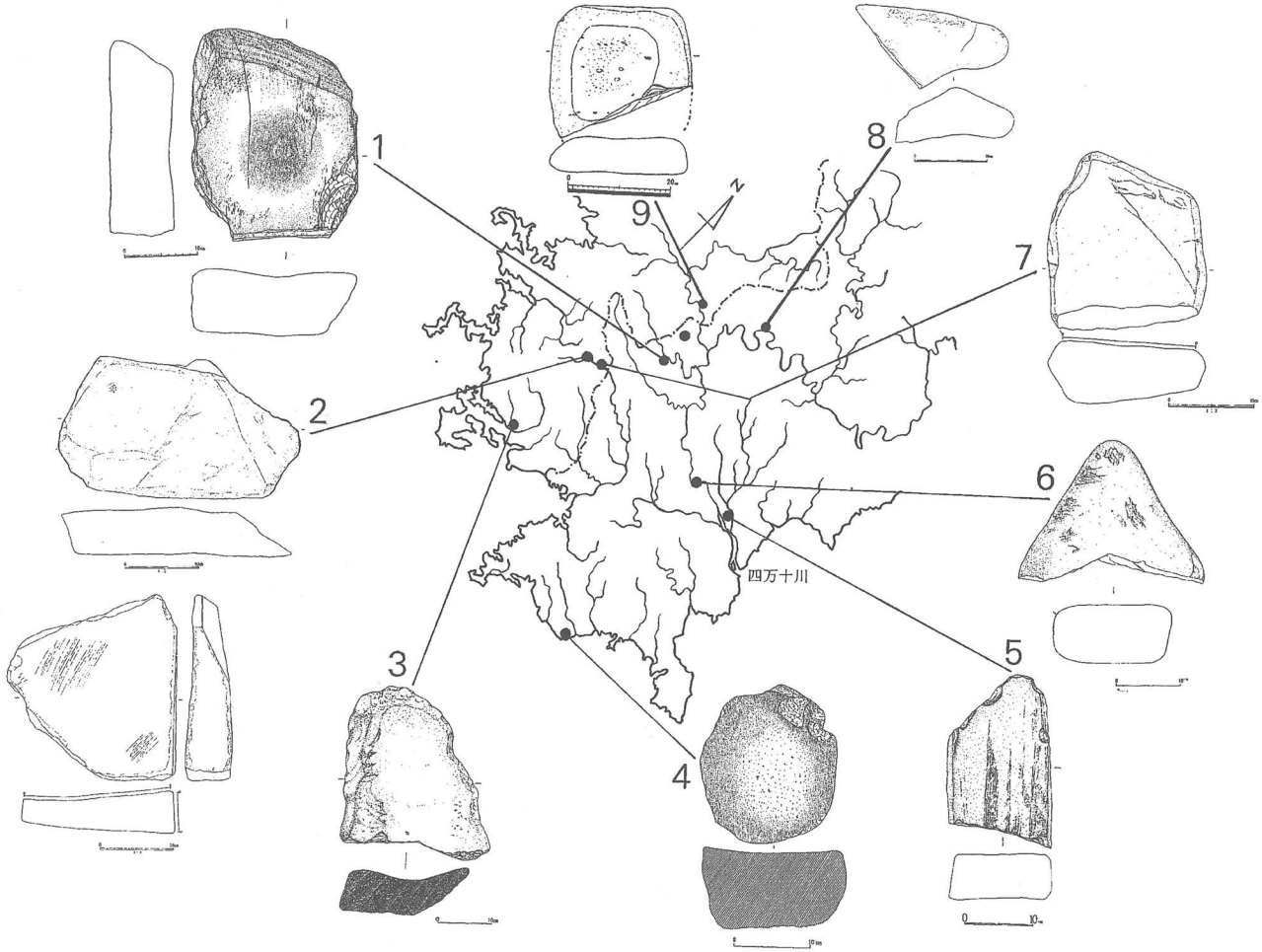
本石錘が発見された当初、このタイプの石錘は四国西南部には皆無とみていたが、資料の見直しをした結果、初崎[19]と広瀬[20]の両遺跡に1点づつが出土していたことが明らかとなった。これらの資料も、本遺跡の例から前期の所産とみなしてよいであろう。実は、両遺跡には前期土器の出土が知られているからである。いずれにしても、四万十川流域における石錘を用いての網漁撈は前期初頭に始まり、短軸両端に打ち欠き加工をみるタイプの石錘が使用されていたことが明確となった。

本地方には後期の石錘として、宿毛貝塚[21]に俵掛け有溝石錘がみられ、下益野B地区遺跡[22]には紐掛け部を磨り切りによって作り出された切目石錘の出土が1点知られている。また、南四国全体では車木遺跡出土石錘タイプは新荘川流域に所在する葉山村姫野々上町遺跡[23]に1例、吉野川上流域の本山町長徳寺[24]に2例、同地区の松ノ木遺跡[25]にも出土例が知られている。姫野々上町、松ノ木の例は前期のものとみなされ、長徳寺のものは押形文土器（高山寺式）に伴出していることから早期のものとみて間違いなく、早くからその存在は知られていたものである。

長徳寺の資料は石錘研究の上から貴重で、車木タイプの石錘の祖型となり得るもので、短軸両側縁に紐掛けを作出するものとしては高知県下最古の石錘である。結局、車木タイプは、その初源を長徳寺の早期に求めることができ、南四国における早期～前期にかけての石錘は短軸両側縁に紐掛けを作り出すタイプのものが主流をなしていたものと推察される。ちなみに、長徳寺の石錘から岡本健児先生は「縄文早期には、小流での淡水漁撈としての特殊な小型建網の存在を考えてよくはなかろうか[26]」と述べられている。車木遺跡の前期縄文人も、前面に流れる小河川の家地川で小建網を使用し、アユやイダ、アマゴなどを対象とした淡水漁撈にいそしんでいたことが考えられるのである。

石錘の他、本遺跡の第2層出土の石器で注目されるものとして大型の石皿（第38図）があげられる。石皿は食生活と直結した生活必需品の一つであり、本地域においても（第43図）に図示した9個所の遺跡より出土が知られている。石質は岩谷遺跡[27]の花崗岩製の他は総て砂岩製で、扁平な自然石を利用したものであり大型のものが多い。ただ本遺跡の石皿は、大きさにおいては本地域で最大を誇るものである。これらの石皿で木ノ実（堅実類）を磨潰し粉状としたり、獣・魚肉をミンチ状とするなど調理具として重宝されていたと思われ、時にはクッキーやパン状に加工するための捏台としても使用されたことと思われる。石皿の表面に残る摩耗痕がその使用の激しさを物語る。

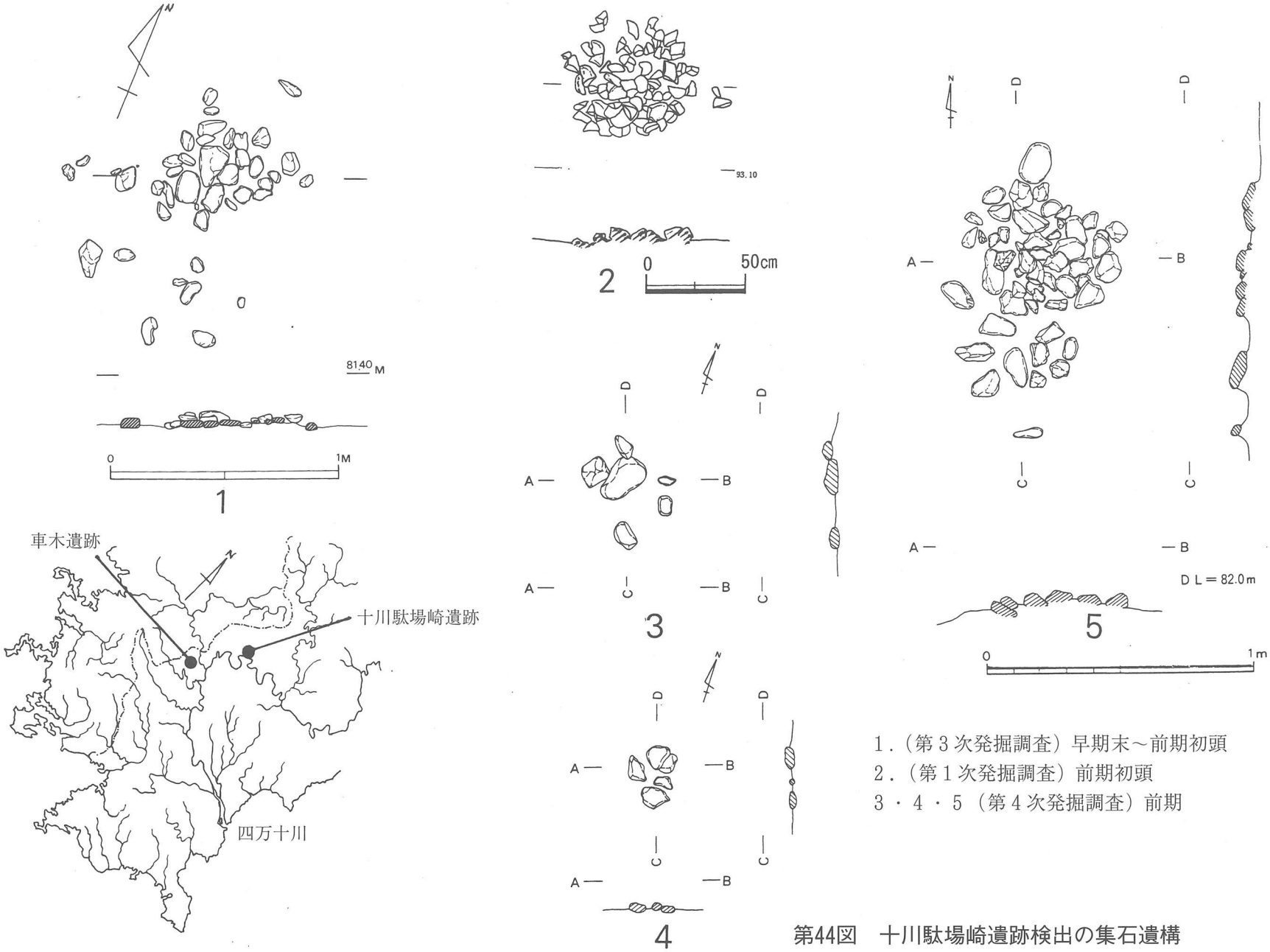
本石皿はA－4区の出土であるが、この石皿に接して集石遺構1基が検出され、さらにA－2区でも1基が検出された。2基の集石遺構を形成する礫は総てが火熱によって赤褐色に変色し、礫の表面には獣肉の脂肪であろうか黒くタール状となった付着物が認められた。これらにより2基の遺構は、形状に若干の難点はあるものの獣、魚肉類を蒸し焼きするための集石炉と



第43図　四国西南部における縄文期の石皿出土遺跡分布図

（遺　跡）

No.1 大宮・宮崎第2地点（後期）、2 中駄場（前期）、3 平城貝塚（後期）、4 片粕（後期）
5 中村貝塚（晩期）、6 三里（後期）、7 犬除（後期）、8 十川駄場崎（早期）、9 岩谷（後期）



1.（第３次発掘調査）早期末～前期初頭
2.（第１次発掘調査）前期初頭
3・4・5（第４次発掘調査）前期

第44図　十川駄場崎遺跡検出の集石遺構

考えて大過ない。

本遺構の検出例は県下では乏しく、わずか十和村の十川駄場崎遺跡[28]に知られているにすぎない（第44図）。十川駄場崎では縄文早期にその存在が確かめられ、前期にも確認されている。中期～晩期にかけての時期のものとしては現在のところ確認例はない。県下における集石炉の使用は、現段階では早期に始まり、前期までということになる。

他に多数の石材核がみられるが、これは早期～前期に編入され、石材核の多さから本遺跡の早期～前期には石器作りが盛んに行われていたことが明らかである。それらの石材核にみられる剥片剥離技法は、大宮・宮崎第１地点遺跡（後期）の資料にみる技法に共通する。それによって、本地方における剥片剥離技法が早期から晩期にかけ一貫してあまり変化せず存続していたことが明確となった。

要するに今回発掘調査したこの場所は、食糧となる肉類の蒸し焼き遺構（集石炉）２基の存在と、動物の解体や皮剥ぎ器として機能した多数のスクレイパー、調理具たる大型石皿の出土等、これらを合わせ考えて、この地は前期縄文人の料理場、すなわち台所であった可能性が強い。そして、当地の前期縄文人は石錘を用いた網漁撈と石鏃での弓・矢による狩猟を生業の主体とし旺盛な生活を送っていたことが察知されるのである。それにしても、本遺跡の生活場としての中心地は、発掘調査を実施した前面に広がる平坦地にあることは詳述するまでもない。この場所の調査が実現していれば住居跡の検出は可能であったと考える。ただ、この場所は盛り土され破壊されることなく温存されていることは幸いといわなくてはなるまい。いずれにしても発掘調査の資料に見る限り、本遺跡に最初に住み着いたのは縄文早期であり、その時期は狩猟のキャンプ地であったと考えられ、次の前期を迎え九州、瀬戸内両地方からの文化波及を受け、その中で発展し集落の形成に至ったと思われる。本遺跡の前期は言わば内陸山地にみる集落遺跡であったと推察されるのである。

註

（１）木村剛朗『大宮・宮崎遺跡Ⅰ』高知県西土佐村埋蔵文化財調査報告書第３集、高知県西土佐村教育委員会、平成11年。出原恵三『大宮・宮崎遺跡Ⅱ』高知県西土佐村埋蔵文化財調査報告書第２集、高知県西土佐村教育委員会、平成10年。

（２）松田直則『奈路遺跡』十和村埋蔵文化財発掘調査報告書第４集、高知県十和村教育委員会、平成５年。

（３）前田光雄『木屋ヶ内遺跡』大正町教育委員会、平成７年。

（４）町田洋他「テフラと日本考古学－考古学研究と関係するテフラのカタログ－」『古文化財に関する保存科学と人文・自然科学』平成４年。

（５）吉本拡『梶郷駄場遺跡調査報告書』愛媛県教育委員会、昭和57年。

（６）岡本健児「第二章縄文時代」『高知県史考古編』高知県、昭和43年。木村剛朗「竜ケ迫、ムクリ山遺跡」『四国西南沿海部の先史文化－旧石器・縄文時代－』幡多埋文研、平成７年。

（７）木村剛朗『大宮・宮崎遺跡Ⅰ』高知県西土佐村埋蔵文化財調査報告書第３集、高知県西土佐村教育委員会、平成11年。

（８）木村剛朗『大宮・宮崎遺跡Ⅰ（続編）』高知県西土佐村埋蔵文化財調査報告書第４集、高知県幡多郡西土佐村教育委員会、平成12年。

（９）岡本健児・広田典夫『高知県広瀬遺跡発掘調査報告書』十和村教育委員会、昭和48年。木村剛朗「広瀬遺跡」『四万十川流域の縄文文化研究』幡多埋文研、昭和62年。

(10) 木村剛朗『高知県梼原の縄文遺跡と遺物』土佐考古学叢書１、昭和53年。
(11) 註(7)に同じ。
(12) 木村剛朗「影平遺跡」『四国西南沿海部の先史文化－旧石器・縄文時代－』幡多埋文研、平成７年。
(13) 木村剛朗「池ノ岡遺跡」『四国西南沿海部の先史文化－旧石器・縄文時代－』幡多埋文研、平成７年。橘昌信『池ノ岡遺跡試掘調査報告書』津島町教育委員会、平成３年。
(14) 木村剛朗「愛媛県深泥縄文遺跡の紹介」『西四国』第２号、西四国郷土研究会、昭和43年。
(15) 註(5)に同じ。
(16) 木村剛朗「高知県松尾遺跡」『考古学ジャーナル38』ニューサイエンス社、昭和44年。木村剛朗「唐人駄場遺跡」『四国西南沿海部の先史文化－旧石器・縄文時代－』幡多埋文研、平成７年。
(17) 木村剛朗『姫島産黒曜石の交易』土佐考古学叢書２、昭和53年。木村剛朗「双海中駄場遺跡」『四国西南沿海部の先史文化－旧石器・縄文時代－』幡多埋文研、平成７年。
(18) 木村剛朗「平野茶園遺跡」『四国西南沿海部の先史文化－旧石器・縄文時代－』幡多埋文研、平成７年。
(19) 木村剛朗「初崎遺跡」『四万十川流域の縄文文化研究』幡多埋文研、昭和62年。木村剛朗「初崎遺跡」『四国西南沿海部の先史文化－旧石器・縄文時代－』幡多埋文研、平成７年。
(20) 註(9)に同じ。
(21) 木村剛朗「宿毛貝塚」『四国西南沿海部の先史文化－旧石器・縄文時代－』幡多埋文研、平成７年。
(22) 木村剛朗「下益野Ｂ地区遺跡」『四国西南沿海部の先史文化－旧石器・縄文時代－』幡多埋文研、平成７年。
(23) 山本哲也『姫野々上町・新土居宇津ケ薮・永野遺跡』高知県葉山村埋蔵文化財発掘調査報告書、葉山村教育委員会、昭和59年。
(24) 岡本健児・前田和男他『長徳寺址発掘調査報告書』高知県長岡郡本山町教育委員会、昭和52年。
(25) 前田光雄・出原恵三『松ノ木遺跡Ｉ』本山町埋蔵文化財調査報告書第３集、本山町教育委員会、平成４年。前田光雄『松ノ木遺跡Ｖ』本山町埋蔵文化財発掘調査報告書第11集、高知県長岡郡本山町教育委員会、平成12年。
(26) 岡本健児『日本の古代遺跡39高知』保育社、平成元年。
(27) 西田栄・犬飼徹夫・十亀幸雄『岩谷遺跡』岩谷遺跡発掘調査団、広見町教育委員会、昭和54年。
(28) 木村剛朗「北幡の縄文時代」『十和村史』十和村、昭和59年。山本哲也・岡本桂典『十川駄場崎遺跡跡発掘調査報告書』十和村教育委員会、平成元年。森田尚宏『十川駄場崎遺跡発掘調査報告書』高知県埋蔵文化財調査報告書第34集、高知県教育委員会、平成２年。前田光雄『十川駄場崎遺跡』第５次発掘調査、十和村埋蔵文化財発掘調査報告書第５集、高知県幡多郡十和村教育委員会、平成８年。

挿図図版の出典

（第39図）

町田洋他「テフラと日本考古学－考古学研究と関係するテフラのカタログ－」『古文化財に関する保存科学と人文・自然科学』平成４年。

（第40図）

遺跡No.（１）犬飼徹夫「愛媛県宇和島市無月出土の前期縄文土器」『西四国』第４号、昭和48年。

（２）木村剛朗『大宮・宮崎遺跡Ｉ』高知県西土佐村埋蔵文化財調査報告書第３集、西土佐村教育委員会、平成11年。

（３）木村剛朗『大宮・宮崎遺跡Ｉ（続編）』高知県西土佐村埋蔵文化財調査報告書第４集、西土佐村教育委員会、平成12年。

（４）橘昌信『池ノ岡遺跡試掘調査報告書』津島町教育委員会、平成３年。
（６）多田仁『中駄場遺跡』愛媛県埋蔵文化財調査センター、埋蔵文化財調査報告書第44集、平成11年。
（９）吉本拡『梶郷駄場遺跡調査報告書』愛媛県教育委員会、昭和57年。
(17) 出原恵三・松田直則他『船戸遺跡』㈶高知県文化財団埋蔵文化財センター、平成８年。
(18) 木村剛朗「北幡の縄文時」『十和村史』十和村、昭和59年。
(20) 山本哲也『十川駄場崎遺跡発掘調査報告書』高知県教育委員会、昭和63年。
(21) 岡本健児「高知県広瀬縄文遺跡の調査」『高知県文化財調査報告書第13集、高知県教育委員会、昭和38年。岡本健児・広田典夫『高知県広瀬遺跡発掘調査報告書』十和村教育委員会、昭和48年。
(22) 前田光雄『木屋ケ内遺跡』大正町教育委員会、平成７年。
(23) 犬飼徹夫他『江川中畝遺跡』高知県西土佐村埋蔵文化財調査報告書第５集、西土佐村教育委員会、平成12年。

（５・７・８・10・11・12・13・14・15・16）木村剛朗『四国西南沿海部の先史文化－旧石器・縄文時代－』幡多埋文研、平成７年。
(19) 木村剛朗『四万十川流域の縄文文化研究』幡多埋文研、昭和62年。

（第41図）

遺跡№（２）木村剛朗『大宮・宮崎遺跡Ⅰ』高知県西土佐村埋蔵文化財調査報告書第３集、西土佐村教育委員会、平成11年。
（３）木村剛朗『大宮・宮崎遺跡Ⅱ（続編）』高知県西土佐村埋蔵文化財調査報告書第４集、西土佐村教育委員会、平成12年。
(15) 犬飼徹夫他『江川中畝遺跡』高知県西土佐村埋蔵文化財調査報告書第５集、西土佐村教育委員会、平成12年。
(19) 出原恵三・松田直則他『船戸遺跡』中村・宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ、㈶高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第27集、高知県教育委員会、平成８年。
(20) 曽我貴行『国見遺跡』中村市教育委員会、平成６年。
(54) 犬飼徹夫・猪石広明他『茶道Ⅱ遺跡発掘調査報告書』一本松町文化財調査報告書Ⅰ、一本松町教育委員会、平成６年。
(56) 文献(54)に同じ。
(57) 文献(54)に同じ。
(65) 岡本健児「高知県広瀬縄文遺跡の調査」『高知県文化財調査報告書第13集』高知県教育委員会、昭和38年。岡本健児・広田典夫『高知県広瀬遺跡発掘調査報告書』十和村教育委員会、昭和48年。

(68) 森田尚宏『十川駄場崎遺跡発掘調査報告書』第4次発掘調査概要報告、高知県埋蔵文化財調査報告書第34集、高知県教育委員会、平成3年。

(77) 岡本健児・広田典夫「船戸遺跡の調査報告」『高知県埋蔵文化財調査報告書第13集』高知県教育委員会、昭和38年。

(78) 吉本拡『梶郷駄場遺跡調査報告書』愛媛県教育委員会、昭和57年。

(79・80・83・84・85・86・89) 御荘町『御荘町史』昭和45年。

(90) 多田仁『犬除遺跡』津島町教育委員会、平成12年。

(91) 多田仁『中駄場遺跡』愛媛県埋蔵文化財調査センター、平成11年。

(96) 西田栄・犬飼徹夫・十亀幸雄『岩谷遺跡』広見町教育委員会、昭和54年。

(98) 前田光雄『木屋ヶ内遺跡』大正町教育委員会、平成7年。

(4・5・6・7・8・9・10・11・12・16・17・18・20・21・23・32・63・64・66・67・71・72・73・74・75・76・95) 木村剛朗『四万十川流域の縄文文化研究』幡多埋文研、昭和62年。

(24・25・26・27・28・29・30・31・32・35・36・37・38・39・40・41・42・43・44・45・46・47・48・49・50・51・52・53・55・58・59・60・61・62・69・78・81・87・88・93・94・97) 木村剛朗『四国西南沿海部の先史文化－旧石器・縄文時代』幡多埋文研、平成7年。

(13) 今城宗久氏資料による。

(14) 今城宗久氏資料による。

(22) 浜田薫氏資料による。

(33) 浜田薫氏資料による。

(34) 浜田薫氏資料による。

(92) 浜田薫氏資料による。

(70) 田辺猛氏資料による。

(82) 木村剛朗の資料による。

(第42図)

遺跡No.(2) 木村剛朗『大宮・宮崎遺跡Ⅰ』高知県西土佐村埋蔵文化財調査報告書第3集、西土佐村教育委員会、平成11年。

(3) 木村剛朗『大宮・宮崎遺跡Ⅰ(続編)』高知県西土佐村埋蔵文化財調査報告書第4集、西土佐村教育委員会、平成12年。

(8) 岡本健児・広田典夫・木村剛朗『高知県三里遺跡』中村市教育委員会、昭和53年。

(9) 曽我貴行『国見遺跡』中村市教育委員会、平成6年。

(10) 出原恵三・松田直則他『船戸遺跡』中村・宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ、㈶高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第27集、高知県教育委員会、平成8年。

(21) 犬飼徹夫他『江川中畝遺跡』高知県西土佐村埋蔵文化財調査報告書第5集、西土

佐村教育委員会、平成12年。
(22) 岡本健児「高知県広瀬遺跡の調査」『高知県文化財調査報告書第13集』高知県教育委員会、昭和38年。
(23) 山本哲也『十川駄場崎遺跡発掘調査報告書』高知県十和村教育委員会、昭和63年。
(28) 岡本健児・木村剛朗『新土居の遺跡と遺物』葉山村教育委員会、昭和51年。
(29) 山本哲也『姫野々上町・新土居宇津ケ薮、永野遺跡』高知県葉山村埋蔵文化財発掘調査報告書、葉山村教育委員会、昭和59年。
(30) 出原恵三『西分増井遺跡群発掘調査報告書』春野町教育委員会、平成2年。
(31) 江戸秀輝・松村信博『栄エ田遺跡』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第22集、平成7年。
(32) 高知県教育委員会『田村遺跡群』第1分冊、高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書、昭和61年。
(33) 前田光雄・出原恵三『松ノ木遺跡Ⅰ』本山町埋蔵文化財調査報告書第3集、本山町教育委員会、平成4年。
(34) 岡本健児他『長徳寺址発掘調査報告書』高知県長岡郡本山町教育委員会、昭和52年。
(35) 西田栄・犬飼徹夫・十亀幸雄『岩谷遺跡』広見町教育委員会、昭和54年。
(36) 多田仁『犬除遺跡』愛媛県北宇和郡津島町埋蔵文化財調査報告書第1集、津島町教育委員会、平成12年。
(38) 犬飼徹夫・猪石広明他『茶道Ⅱ遺跡発掘調査報告書』一本松町文化財調査報告書Ⅰ、一本松町教育委員会、平成6年。
(40) 岡本健児他『山根遺跡の発掘』春野町教育委員会、昭和56年。
(4・5・6・7・9・11・12・13・24・25・26・27) 木村剛朗『四万十川流域の縄文文化研究』幡多埋文研、昭和62年。
(11・14・15・16・17・18・37) 木村剛朗『四国西南沿海部の先史文化－旧石器・縄文時代－』幡多埋文研、平成7年。
(19・20)今城宗久氏資料による。

(第43図)

遺跡No.(1) 木村剛朗『大宮・宮崎遺跡Ⅰ(続編)』高知県西土佐村埋蔵文化財調査報告書第4集、高知県幡多郡西土佐村教育委員会、平成12年。
(2) 多田仁『中駄場遺跡』愛媛県埋蔵文化財センター、愛媛県教育委員会、平成11年。
(3) 木村剛朗『平城貝塚』愛媛県南宇和郡御荘町平城貝塚第Ⅳ次発掘調査報告書、御荘町教育委員会、昭和50年。
(4) 岡本健児・広田典夫・木村剛朗『高知県片粕遺跡』高知県文化財調査報告書第19集、高知県教育委員会、昭和50年。

（５）木村剛朗「中村貝塚」『四国西南沿海部の先史文化－旧石器・縄文時代－』幡多埋文研、平成７年。
（６）岡本健児・広田典夫・木村剛朗『高知県三里遺跡』中村市教育委員会、昭和53年。
（７）多田仁『犬除遺跡』愛媛県北宇和郡津島町埋蔵文化財調査報告書第１集、津島町教育委員会、平成12年。
（８）前田光雄『十川駄場崎遺跡』第５次発掘調査、十和村埋蔵文化財発掘調査報告書第５集、高知県十和村教育委員会、平成８年。
（９）西田栄・犬飼徹夫・十亀幸雄『岩谷遺跡』広見町教育委員会、昭和54年。

（第44図）

集石遺構№（１）山本哲也・岡本桂典『十川駄場崎遺跡発掘調査報告書』十和村埋蔵文化財調査報告書第３集、平成元年。
（２）木村剛朗「北幡の縄文時代」『十和村史』十和村、昭和59年。
（３・４・５）森田尚宏『十川駄場崎遺跡発掘調査報告書』第４次発掘調査概要報告、高知県埋蔵文化財調査報告書第34集、高知県教育委員会

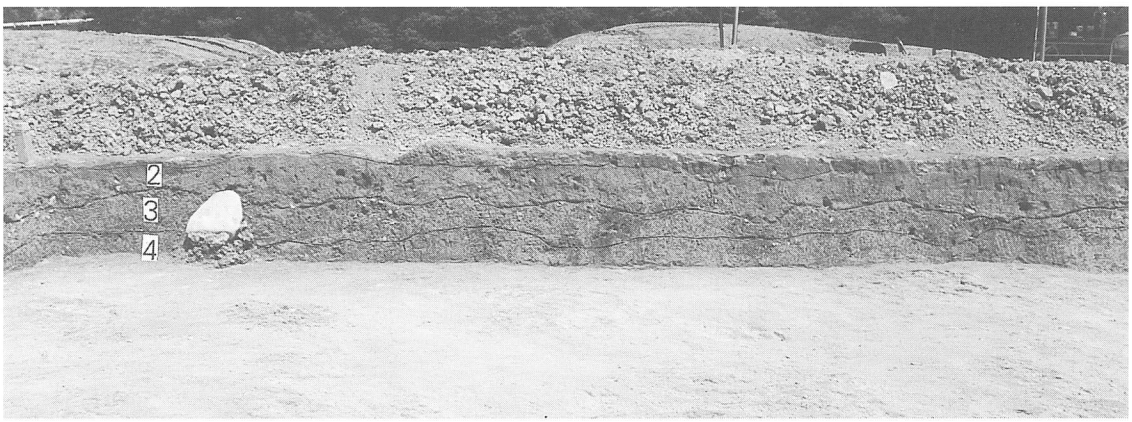
写 真 図 版 編

(1)　車木遺跡全景

(2)　A－1区最深部掘り下げ状況

(1)　A－1区C面土層堆積状況

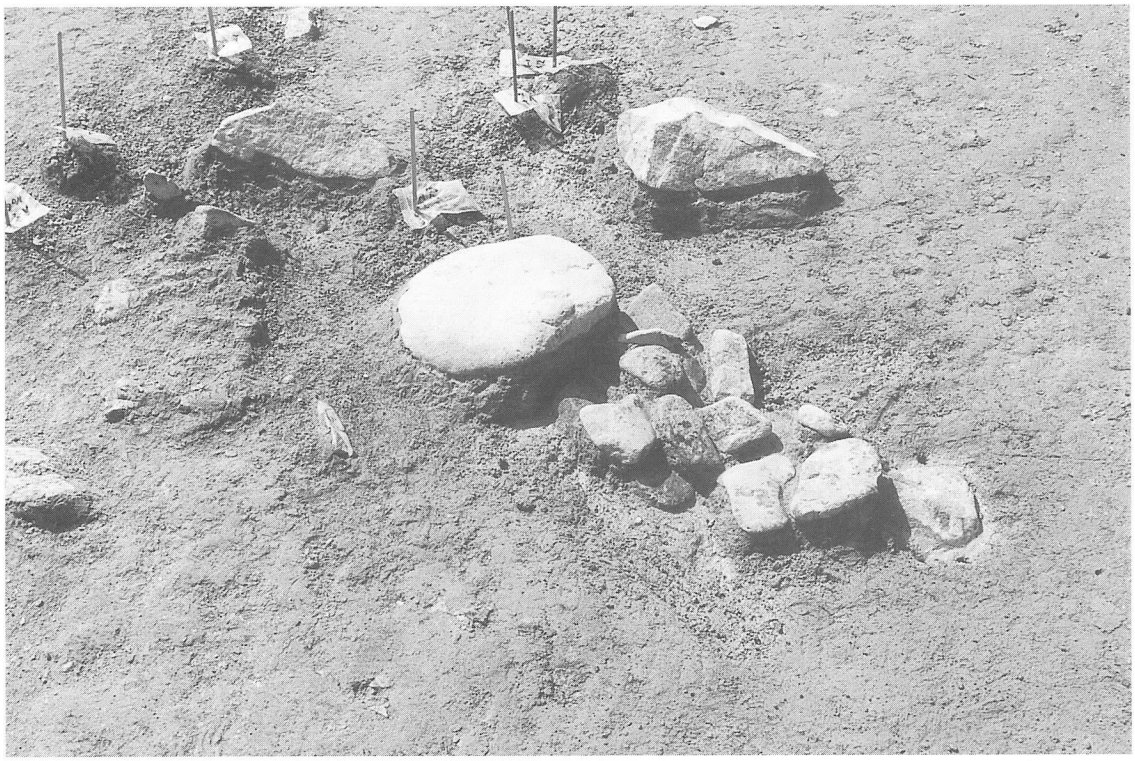
(2)　A－2区A面土層堆積状況



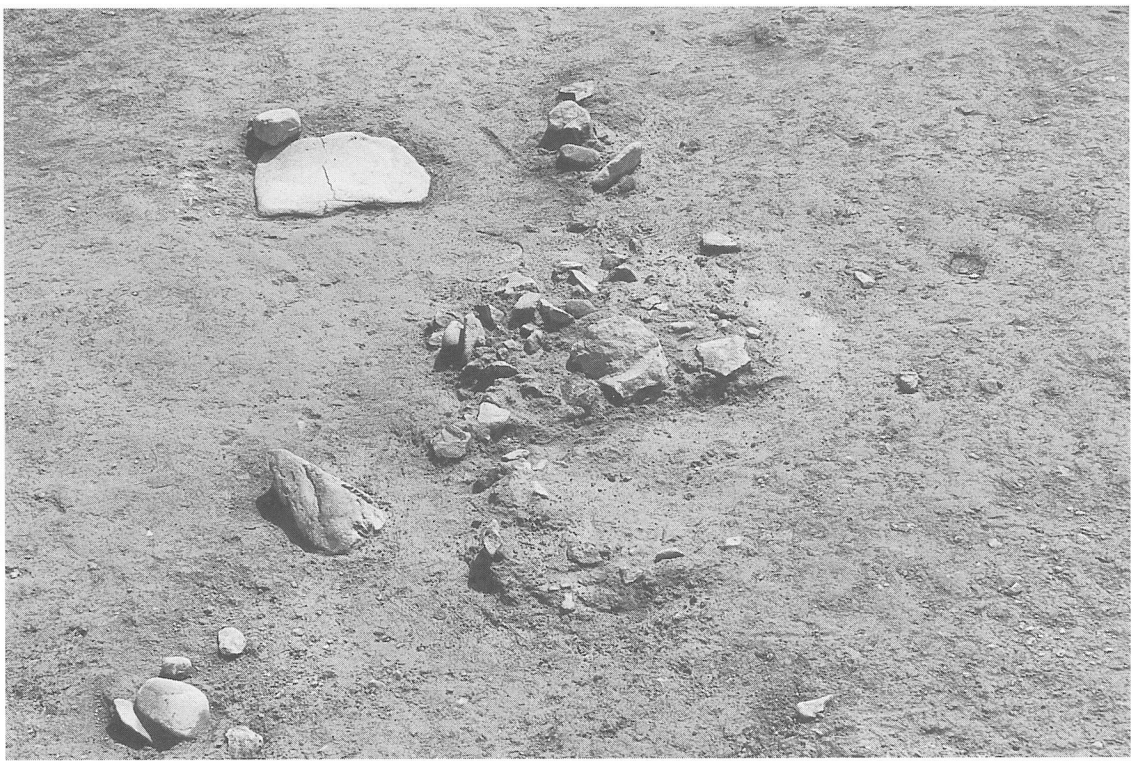
(3)　A－4区A面土層堆積状況

(1)　A－2区第2層の集石遺構、遺物出土状況

(2)　A－4区に残る畦



(1)　A－2区第2層に検出の集石遺構

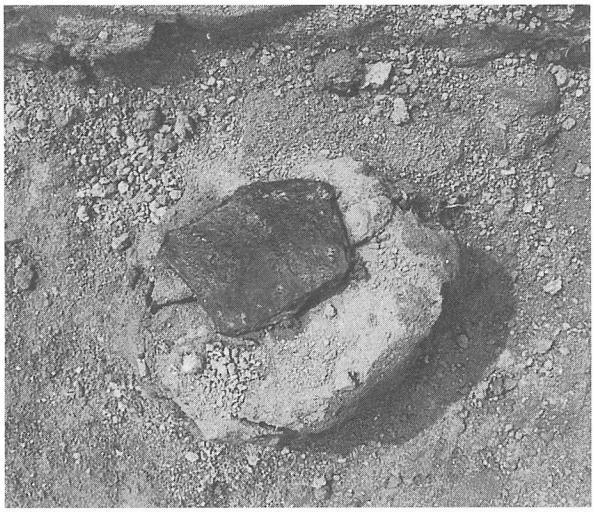


(2)　A－4区第2層に検出の集石遺構と石皿出土状況

(1)　29－7、深鉢胴部片出土状況

(2)　A－2区土器出土状況

(1) 29－３、深鉢口縁部片出土状況



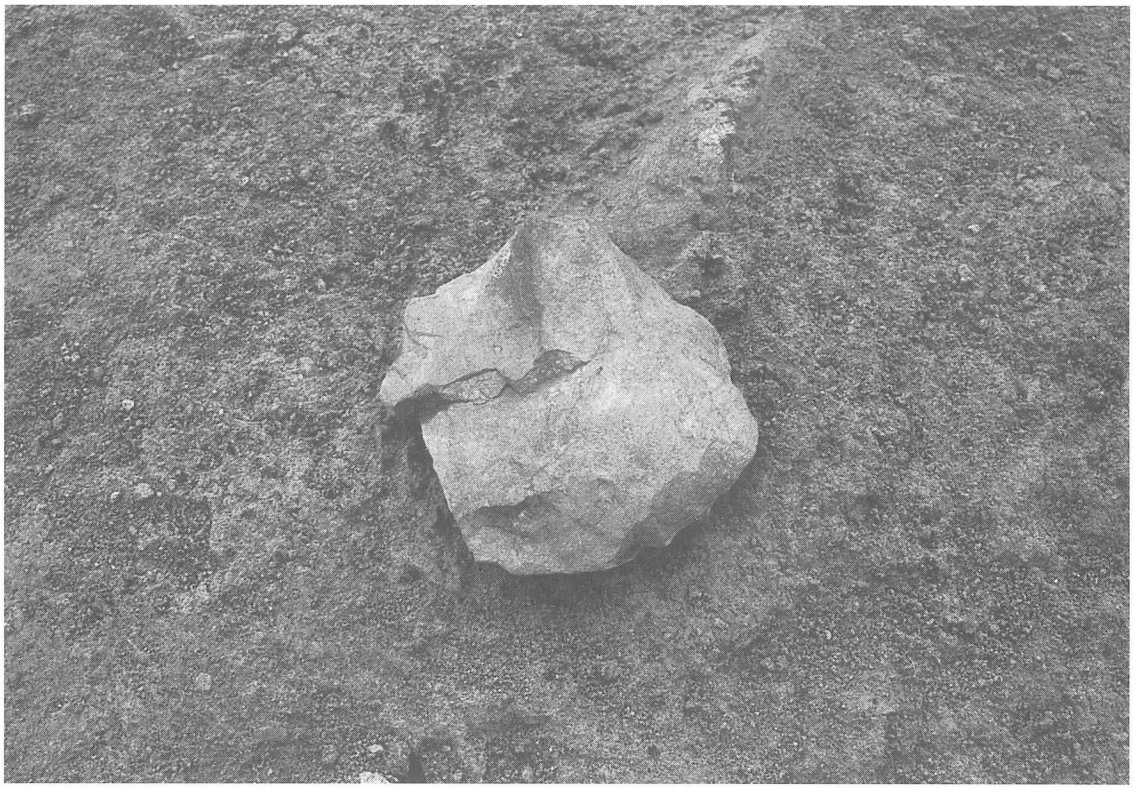
(2) 29－11、深鉢胴部片出土状況

(3) 29－１、深鉢口縁部片出土状況

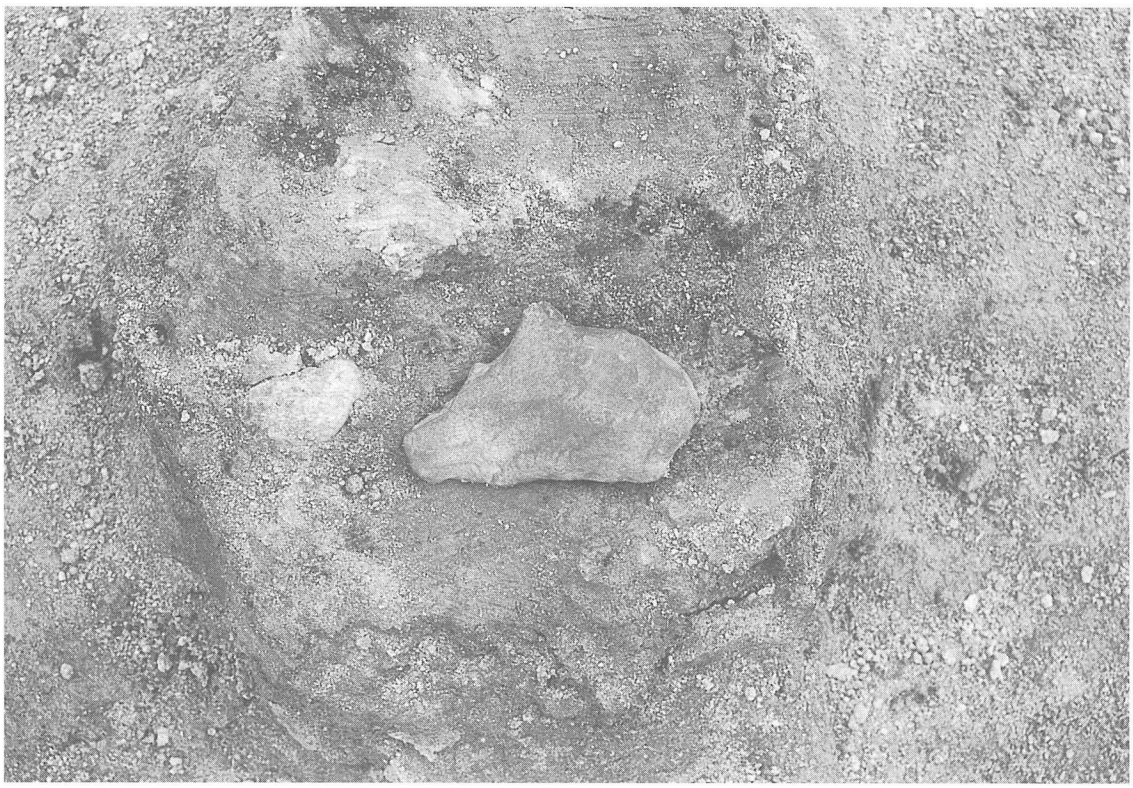
(4) 29－13、深鉢胴部片出土状況

(5) 29－４、深鉢頸部片出土状況

(6) 27－13、擂鉢口縁部片出土状況



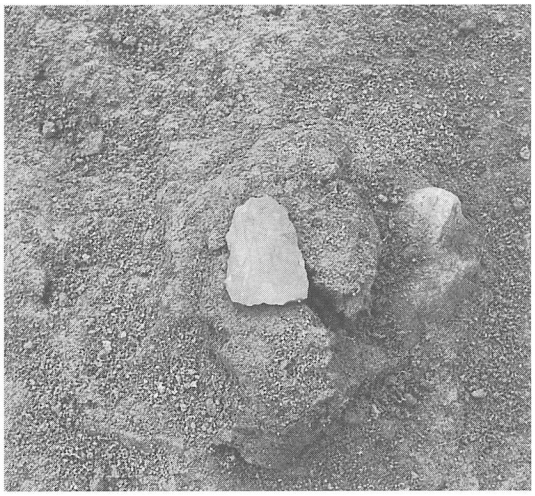
(1) 36－1、石材核出土状況



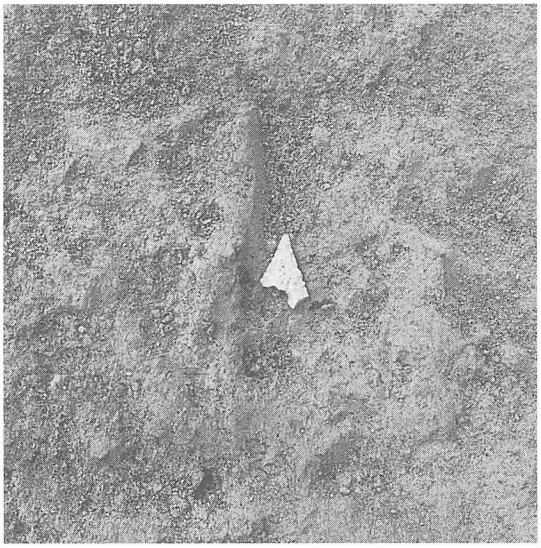
(2) 32－6、スクレイパー出土状況

(1) 34－4、叩石出土状況

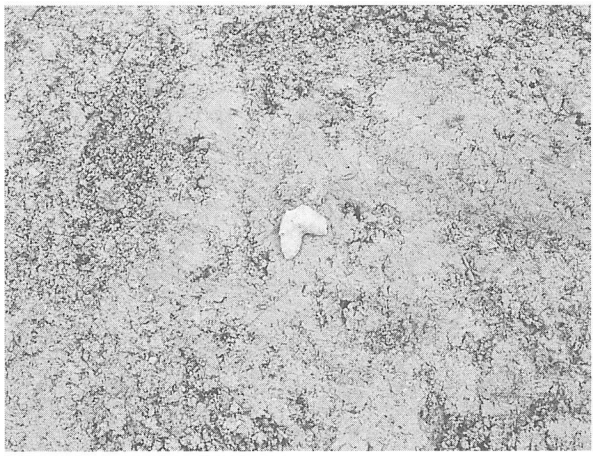
(2) 31－5、石錘出土状況



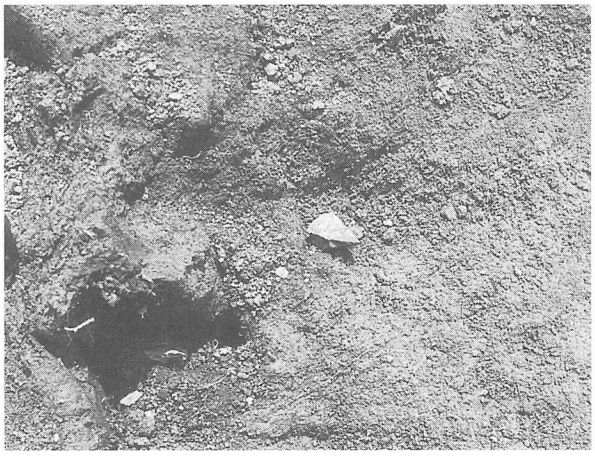
(1) 33－5、スクレイパー出土状況



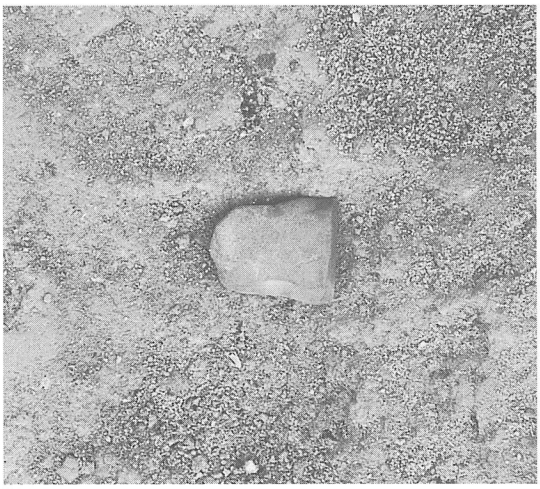
(2) 30－1、石鏃出土状況



(3) 30－9、石鏃出土状況



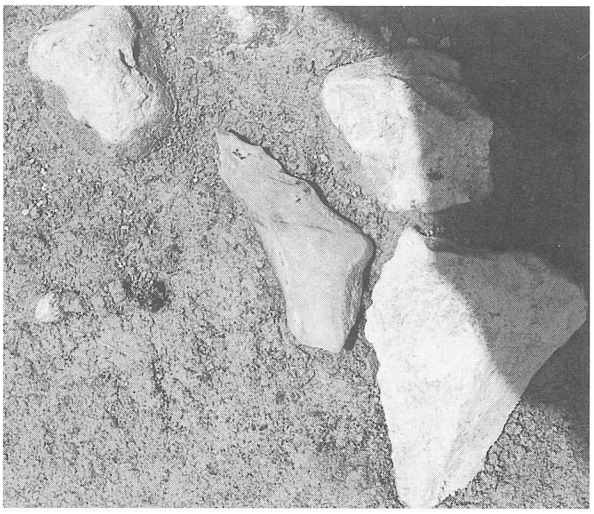
(4) 姫島産黒曜石剥片出土状況



(5) 32－3、打製石斧頭部残片出土状況

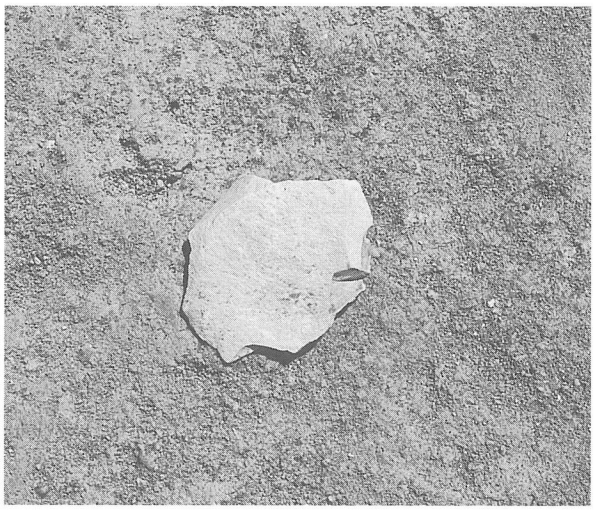
(6) 30－8、石鏃出土状況

(1)　A－1区石器剥片出土状況

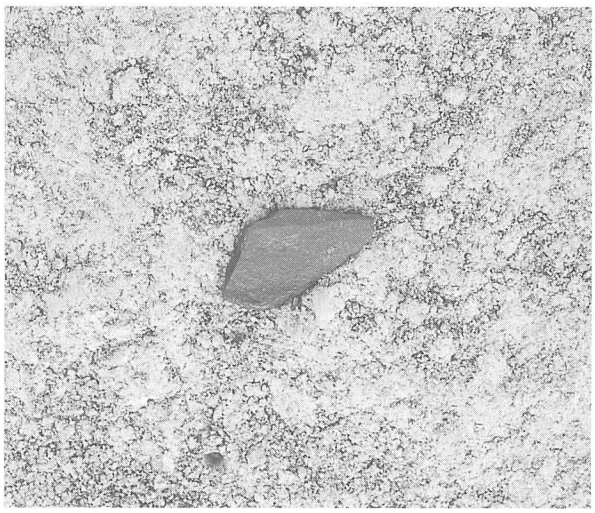


(2)　A－2区石器剥片出土状況

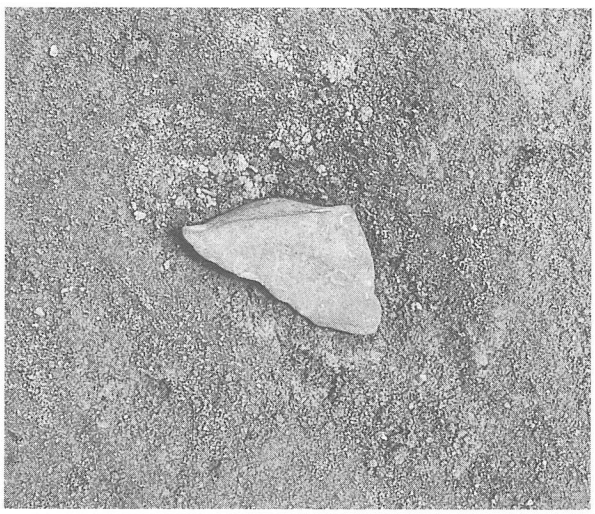
(3)　19－2、石器剥片出土状況



(4)　19－8、石器剥片出土状況



(5)　18－3、石器剥片出土状況



(6)　32－7、スクレイパー出土状況

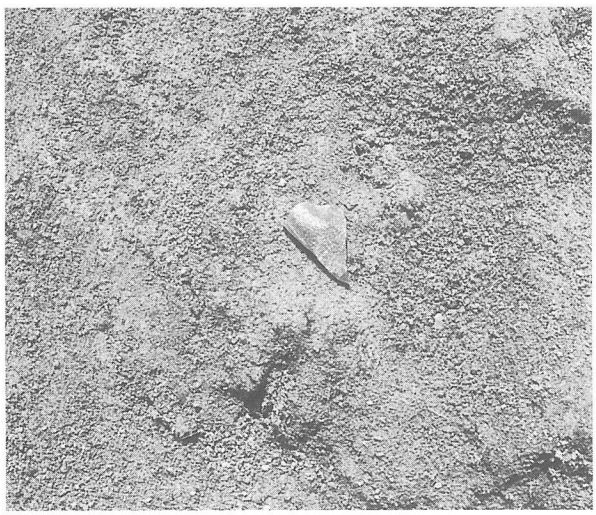
(1) 18－8、石器剥片出土状況

(2) A－1区石器剥片出土状況

(3) 18－4、石器剥片出土状況

(4) 21－6、姫島産黒曜石剥片出土状況

(5) 19－12、姫島産黒曜石剥片出土状況



(6) A－1区姫島産黒曜石剥片出土状況